

柳生新陰流兵法伝書の思想体系（第一部）

——「第一伝書」の解読と心法論——

高橋 進

序

我が邦人に一種微妙の道念あり。神道にあらざれば儒道にあらざれば仏道にあらざれば、神儒仏三道融合の道念にして、中古以降専ら武門に於いて其著しきを見る。鉄太郎之を名付けて武士道といふ。然れども未だ嘗て文書に認め経に綴りて伝ふるものあるを見ず。蓋、人事の変遷と共に種々の経験により吾人の感念に寄与せられたる一種の道徳なるが如し。

今日、斯る道念を形作るに至りしもの、是れ決して一朝一夕の業にはあらざるべし。様々生死の間に出入し鍛錬陶冶して始めて今日に至りしなるべし。……⁽¹⁾

右は幕末動乱の渦中、將軍慶喜の意を請け、官軍の參謀西郷隆盛の駿府本營に赴き、これと談判して終に江戸城の無血開城と、江戸が戦禍から免れる端緒を開いた山岡鉄舟（天保七年・一八三六―明治二十一年・一八八八）の書いた「武士道論」の冒頭にみえる一文である。

武士道といへば、一般には戦国時代の『甲陽軍艦』、大久保忠敬の『三河物語』、山本常朝の『葉隠』、山鹿素行の『山鹿語録』における「士道」論等々に代表される新旧タイプの武士道論⁽²⁾にみられる武士の生き方や処世の論理ないし道徳を指すのが常套であろう。これらの書冊に論じられている武士道論は、極めて明確にして特徴ある論理を示している。しかるに山岡鉄舟の右の一文では、武士道とは「一種微妙の道念」であり、しかもそれは、未だ嘗て文書に書き記されたり、経文の如きに綴られて伝えられてきたものではなく、長年月の間、武士たちが生死の間に出入し、鍛錬して形成してきた「吾人の感念に寄与せられたる一種の道徳」の如きものという。

山岡鉄舟は、勝海舟と互いに心を許し合った同時期の、共に剣の達人である。彼らは幕府に仕えた武士のうちでも、最も將軍家に忠勤を励んだ武士であり、明治維新以後も、海舟は明治政府に、鉄舟は明治天皇の侍従として出仕した。鉄舟は九歳で「真影流」を学び始め、十七歳の頃から「北辰一刀流」を千葉周作の道場で学び、遂に自己の剣を「一刀流」から「無刀流」と自称する境地にまで到達した。海舟も幕末の剣道の達人島田虎之助の門下で免許皆伝を得ており、両者ともに禅の修行をしている。幕末から明治にかけて、多くの傑出した人士が活躍したが、彼ら二人は剣の道をもって人間的自己形成に励み、それに達した人物と評されるし、兩人もそれを自認している。⁽³⁾

海舟は「おれに山岡を評せよというなら、『天下の傑士、日本の忠臣』と言えば足りている。また、『武士道』一篇の大意は『知徳不二の大原則をわきまえ、至誠事を貫け』というのだ。これがおれの評だよ。……』⁽⁴⁾」と語っている。

このように海舟によって評された鉄舟が、武士道について「一種微妙の道念」と特徴づけたのは、先にも述べたごとく、武士道論として後世に伝えられてきた文書に記されたものを意味していないことが改めて確認されるとともに、鉄舟の「武士道」は、「余の剣法や只管其技を之れ重んずるにあらざるなり。其心理の極致に悟入せんことを欲するにあるのみ。換言すれば、天道の発源を極め、併せて其用法を弁せんことを願ふにあり。猶切言すれば、見性悟道なるのみ。以下不可言⁽⁵⁾。」と述べているように、劍禅一如の行的（実践的）境位に裏打ちされていた。先に、剣の道をもって人間的自己形成に努めた人と述べたが、その自己形成は、単に現代教育学的意味におけるものでなく、それを超えて眞実自己の発見を窮め尽くすことを求めたものといえよう。

鉄舟が前述の如き伝承されてきた武士道関係書籍を知らぬ筈はない。にもかかわらず、文書にも経文にも伝えられていないものと明言した「一種微妙の道念」とは果たして何であるのか。それはここでは、剣法の徹底した修練を通して、しかも遂にはそれを超えて到達できる如き「見性」であり、「悟道」であったであろう。剣技ないしは技法の修練が、自己自身の心の在り方、つまり心法と関わらざるを得ない境位の積集の果てに、豁然として開けるであろう悟得の世界は、もはや従前陳述せられ来った武士道に関する文字表象を通して得られる哲学的論理の世界でなく、鉄舟のいわゆる「以下不可言」、「電光影裏春風を斬る」（注5を参照）底のものであったろう。「一種微妙の道念」とは、そのような心の働かないし、在り方を文字に托したものと思われる。それはしかも、剣道の修業者にのみ通ずるものでなく、「嗚呼、諸道の修行も亦如斯耶。古人云ふ、業は勤むるに精し、勤むれば必ず其極致に達すと。諸学人、請ふ、おこたゝるか忽怠。」と鉄舟が前掲「剣法と禅理」の末尾に道破したごとく、諸道の修業

が到達すべき窮極の普遍性をも兼ね包んだものであった。

筆者が本研究で考察しようとする意図している対象は、最終的にはまさにその、日本人に固有の「微妙の道念」の根源とも考えられるものである。別言すれば、それは、日本における伝統的な「技芸」ないし「技芸の道」と称される世界に連なっているものであり、剣の道においては、技法と心法の総合的統一の世界で成就し発現され得るものと考えられる。

従来論ぜられ研究されてきた武士道なるものは、端的にいえば、大陸伝来の学問を土台に、生死を分ける戦場の体験やその（統治集団としての）武家組織体制内の思想化、イデオロギー化として位置づけることができよう。そこには、主従関係の絆（結節）としての規範意識や倫理道徳観、あるいは統治者の側に与する主体としての自己確立や政治道徳としての思想はみられても、剣をとって直接相手と対する格技理論、技術論、そしてそれとともに必然的に省みざるを得ない剣を執る主体の心意識の在り方の徹底追究は具体的に組み込まれていなかった。もとより筆者は従来の伝統的武士道論がかかる位相を無視したり、それと無関係に展開されて来たなどというつもりはない。しかしむしろ、真の武士道は、鉄舟もいうごとく「決して一朝一夕の業」によって形成されたものでなく、「様々生死の間に入出し鍛鑄陶冶して始めて」今日に至った、その「一種微妙の道念」を根柢に置いて形成されて来たというべきであろう。

それ故に、従来の日本思想史研究においても、技法と心法の統一としての兵法論ないし武芸論（広くは芸道思想に連なるもの）を、日本思想の範疇に意識して取り込んで来ていないのが実情であるといつて過言でなく、日本近世の芸道や武芸はむしろ主として歴史学・文学・武道論関係研究者の論及する所であった。武芸論に限っていえば、哲学的な面からこれを一個の思想体系として、全体的・系統的にその内容を考察する専論的研究は殆ど稀であった。⁽⁷⁾武芸関係史料の場合、技法・心法両面を含む史料それ自体を解読することが、極めて困難であることも、思想的研究のなされて来なかった大きな理由であろうと思われる。

しかし、考えてみると、技芸ないし技法の、心魂を傾けた徹底修練を通して「道」の自覚に到達し、ないし鉄舟のいった如く、「見性悟道」の域に達したとされる人々の遺した記録における思想性の哲学的解明、取分けここでは剣の修業を通して実現された心法と技法の総合的統一の思想の体系的研究は、近世日本人の形成した特徴ある文化のもつ精神性を明らかにするものとして重要な意義を有すると思われる。

そこで本研究では、以上の諸点を踏まえて、日本近世に極めて特徴的なものとして産み出された兵法・伝書を取り上げ、その独特の世界観、人

間観、心身論、技術論等を関連的に考察することを目的とし、特にそれが剣の道における心法と技法に関する一つの思想的体系として成立していたことを論証的に明らかにしてみたい。但し、後に知られるように、剣における心法と技法とは、文字の上では、一方は心の在り方・心構え・心の持ち方・心得などと解せられる、心の理法ないし心の働きにかかわる教説と、他方は太刀を取って敵と立相う場合の具体的な太刀の操法との両面に別れるが、「兵法は一心のはたらきにきままるなり」（柳生新陰流『兵法截相の心持』）といわれるように、太刀の技は、それを操る人間の身手足により、またその身手足は視聽を含めて人間の心気意識と断ち難く繋がっている。かくして、心法と技法とは連続であり、二にして一、一にして二の関係にあり、しかも両者共に「理性」を含むものとして統一的であることを、あらかじめ認識しておく必要があると思われる。

一、柳生新陰流兵法伝書の成立

ここにいう兵法伝書とは、具体的には柳生宗厳（大永七年・一五二七―慶長十一年・一六〇六）、宗矩（元龜二年・一五七一―正保三年・一六四六）父子によって作成された、主として剣法に関する伝書を指す。この伝書のうち、宗矩によって最も完全な体系書として叙述され伝えられたものを『柳生新陰流兵法家伝書』（以下これを「家伝書」という）と称する。一般にこのような伝書は、門外不出の秘伝書とされ、極秘裏に祖孫相継承されたものである。

「新陰流」は、直接的には、中世末期剣術諸流派の成立過程において、愛洲移香（惟孝）の「陰流」を継いでこれを創始した上泉伊勢守秀綱が、柳生但馬守宗厳に直伝し、以後「柳生新陰流」として今日に至るまで伝えられている流派をいう。先に、宗厳・宗矩父子によって作成された――と述べたが、厳密にいえば、柳生家に伝承されたいわゆる「兵法伝書」は、宗矩が、上泉秀綱から柳生宗厳へと口伝を含めて秘伝された新陰流の技法・心法に、自己の会得したものを加えて文書の体裁で作成したものである。後にも述べるように、柳生宗厳の遺したものは殆ど箇条的な「目録」のみで、完成された「家伝書」の最初の一巻である『進履橋』だけが、秀綱から宗厳に伝えられたものとして、「目録」と「伝書」の中間の体裁をとっている。

その『進履橋』に触れる前に、いわゆる「兵法伝書」と「目録」の相違を明らかにするため、宗厳が、能の金春禅竹の七代目を継いだ金春（竹田）七郎氏勝に与えた『新陰流兵法目録事』（慶長六年二月、一六〇一）の内容を掲げておこう。

この『新陰流兵法目録事』には、珍しいことに「絵目録」として、つまり新陰流に秘伝された「三学円太刀」の太刀五、「九箇」の太刀九、「天狗抄」の太刀八、「極意」六つの太刀のうち三、都合太刀数二十五の技法の要点を図解して示し、伝授したものと二通りがある。渡辺一郎氏によれば（岩波日本思想体系『近世芸道論』の右目録の解説）、この「絵目録」一卷は、現在、奈良県生駒町宝山寺に所蔵されているという。また、右目録伝授後百年余を経た宝永四年（一七〇七）七月廿五日の日付のある同じ「絵目録」には、松平伊勢守入道信定が、金春八郎重栄、同式部氏睦兩人の乞いによって、各太刀に秘伝され自らも体得して来た技法の解説を書き入れたものが遺されている。これをみると、新陰流の主要な太刀の技法がほぼ理解できる。（今村嘉雄編『史料柳生新陰流』上巻、岩波『近世芸道論』所収）以下では、宗嚴の伝授した「絵目録」及び松平信定が技法を書き入れた「絵目録」でない、もとの『新陰流兵法目録事』（同じく慶長六年二月の日付となっている）の体裁を掲げる。因みに、柳生新陰流に関する前掲今村編史料（以下『史料』という）の中には、数多くの目録が集載されているが、慶長六年二月付の左の目録が最もまとまっており、宗嚴晩年（没する五年前）の伝授にかかる。

〔新陰流兵法目録事〕（『史料』・上巻一八三頁以下）

△三学円太刀

- 一 刀 兩段
- 斬釘 截鉄
- 中開 半向
- 右旋 左転
- 長短 一味
- 右刀のくたき三宛有レ之。
- 乍レ去よくくたき候へハ
- いかほともあるへき也。

△九 箇

- 必勝
- 逆風
- 十太刀
- 和卜
- 睫径
- 小詰
- 大詰
- 八垣

村裏

右くたき鍾々有レ之也。

△天狗抄

太刀数拵八つ

添截そくせき乱截らんせき

無二剣

活人剣

高上

極意

神妙剣

八箇必勝 口伝くたき重々ある也。

△廿七箇条截相

序

上段三 中段三 下段三

破

折甲二 刀棒三 打合三

急

上段三 中段三 下段三

右急はかまへに付而一調子也。

右条々面太刀一通也。重々口伝可レ有レ之者也。

身懸五箇事

第一 身を一重になすへき事

第二 敵のこふしわかかたにくらふへき事

第三 身を沈にしてわかこふしをつけざる事

第四 身をかゝりつきのひさに身をもたせ、跡のえひらをひらく事

第五 吾ひたりのひちをかしめざる事

右五箇随分心懸てよし。極意に重々口伝有レ之也。

一 目付二星・嶺谷・遠山事

一 三箇大事

一 三調子之事

一 三見之事

一 三寸二之事

一 待曲之事

一 色に付色に随事

一 懸待之事

一 小太刀一尺五寸はつしの事

一 太刀つれの事

一 太刀間三尺之事

一 手字手裏見

心ハ万境ニ隨ヒテ転ズ、転ズル処実ニ能ク幽ナリ。流ニ隨ヒテ性ヲ認得スレバ、喜モ無ク亦憂モ無シ。(原漢文)

一 水月事

一 遠近之位調子

大調子・小調子、小調子

大調子しやうか事

一 有無之調子事

一 身離目付擲位事

一 小太刀二寸五分^{はし}迦之事

一 神妙劍

付 身位三重分^{つりなう}之

待曲条々事

心地ハ諸種ヲ含ミ、普雨悉ク皆朋ス。華性ヲ頓悟スレバ、菩提菓目ヲ成ル。(原漢文)

一 二目遺之事

一 指目位調子持所之事

一 氣ハ肩崎(先)見分け目付口伝事

一 兵法之病去事

一 欺味方不持ニ心条々之口伝事

一 間之調子歩之事

哲学・思想論集第十五号

一 勒英雄知心是極一刀習口伝事

一 心底作之事

一 連拍子之事

右条々有口伝也。

上泉武藏守

藤原秀綱

柳生但馬入道

平宗嚴(花押・印)

金春七郎

秦氏勝

柳生石舟斎

慶長六年二月 宗嚴(花押・印)

七十三歳七月吉日、目モ見ヘズ怪シク候ヘドモ、御執心大切ニ存ズル故、此クノ如ク調ヘ之ヲ進メシムル者也。(原漢文)

竹田

金春七郎殿

卷

金春七郎氏勝には、右の「目録」及び「絵目録」を伝授した後にも、次の新しい「目録」が与えられている。

○慶長七年二月吉日（宗祇七十四歳、氏勝二十七歳）

『没茲味手段』（目付之事、不明之、拍子之事、身懸之事、懸左足之事）

『五観之大事稽古口伝』（神妙剣、十字懸之事、太刀相水月位之事、左足積之事、太刀相之事）

『一見之事』（捧心、送目付之事、付空つひらぎ之調子事、清江水之事、茂拍子極意の極也）

○慶長九年霜月十六日（宗祇七十六歳、氏勝二十九歳）

『極意之事』（真捧心、口伝、目付天事料ヨリクタリの条々）

○慶長十一年二月吉日（宗祇七十八歳、氏勝三十一歳）

『兵法之極意』（無刀三箇之大事、尺二相当巻尺三寸之物料巻ツ、真之無刀、吾左之指ニ於テ用意シ目付之事、何モ同前不可有紛、第一清江水茂調子ニ不可有油断事）

取後の『兵法之極意』は、実に宗祇の死（同年四月十九日）の二カ月前に書かれたもので、慶長九年霜月十六日の『極意之事』とともに、『史料』の写真から推して、既に文字は乱れ、宗祇が渾身の氣力を振り絞って記したものと思われる。

以上の五つの「目録」を通観すると、凡そ次のことがいえる。即ち、

①慶長六年二月の『新陰流兵法目録事』と同「絵目録」とでは、後者には刀法の要点が絵入りで示されているほか、両者では載せている内容に相違がある。

②「天狗抄」の項について、前者では「太刀数拵八つ」と出ているだけであるが、後者では八天狗の絵をもって、高林房・風眼房・太郎房・栄意房・智羅天・火乱房・修徳房・金比羅房の各技法を説明している。

③前者の「三学門太刀」の項では、一刀 両断、右旋 左転…と上下離して記し、後者では、一刀両断、斬釘截鉄…と一句にまとめている。これは「家伝書」でも同じである。

④後者は、「廿七箇条截相」をもって終わっているが、前者には「身懸五箇事」以下三十一箇条が記されて詳細である。

⑤前者には「心ハ万境ニ随ヒテ転ズ、……」「心地ハ諸種ヲ含ミ……」等の禪の偈文が挿入されている。

⑥以上からして、後者の「絵目録」は、実際の各刀法の基本的な構えの型を教えるために、絵図を用いて示したものとと思われる。それが「身懸五箇事」以下を欠いているのは、前者の「目録」においては、「身懸五箇事」以下は、主として、「習」（後述）の基本と心法にかかわる項目が挙げられているからであると思われる。それ故に、⑤で述べた禪の偈文は、前者の「目付」以下の箇条の間に挿入されている。

⑦慶長七年二月以降の三つの「目録」は、既に刀法の新しい附加はなく、主として心法にかかわるものだけである。わけても宗巖の死の直前に与えた『兵法之極意』は、わずか二箇条、六行の短い語句であるが、ここに初めて「無刀三箇之大事」「真之無刀」の項があつて、「無刀」の極意を金春七郎氏勝に授けていることがわかる。

⑧因みに、「無刀」の極意については、金春七郎氏勝に与えた以外では、今村編『史料』によれば、わずかに三好左衛門尉房一に対して与えた印可状に、「新陰流兵法、円太刀・截合心持・位其外、拙者若年従り兵術ニ執心シ、諸流ノ極意ノ中、并ビニ某愚意ノ工夫シ出セシ分別ニ及ブ処、極意無刀ノ心持、我等此比存シ出シ候程ノ儀、毛頭モ相残サズ相伝ヘ申シ候。……」（原漢文、傍点筆者。『史料』・上巻二四一―二頁。渡辺一郎氏は前掲解説六五一頁において、この印可状の日付を、天正九年〓一五八一とされるが、『史料』には二月吉日の日付のみで不明。）と見えるのみである。渡辺氏は、右論文において、この印可状の従来永祿八年（一五六五）伝授説を否定しておられるが、『史料』の写真では「二月吉日」とのみ明記されていて、天正九年説を根拠づける立論はされていない。また、『史料』では、右印可状のすべ次に同じく三好左衛門尉宛の印可状が載せられ、これには天正九年辛巳二月吉日とある。この印可状には「極意無刀」の句はない。同年の二月吉日に、ほぼ同じ内容で、極めて重要な「極意無刀」のある印可状とそれのないものが伝授されるであろうか、疑問なしとしない。この問題は今はこれに止めておくが、いずれにせよ、宗巖が極意中の極意とした「無刀」の秘伝は、筆者のみた現存資料による限り、三好左衛門尉房一と金春七郎氏勝の兩人に与えたのみである。

さて、以上によって、宗巖が到達した「極意無刀」までの新陰流目録体系の大体は明らかになったが、その宗巖は流祖上泉伊勢守秀綱から何を印可されたであろうか。現存資料（『史料』・下巻四一〇頁以下）によって確かめておこう。

その一つは、永祿八年（一五六五）四月、上泉伊勢守秀綱が当時の柳生新左衛門尉（天正三年・一五七五、四十八歳より但馬守と号す。この

年三十八歳）に与えた印可状には「此已後執心之旁ニ御座候ハ、堅以テ請段ニ九ヶ迄御指南尤候、其上之儀ハ、可レ寄ニ真実之人ニ候、…」とあつて、「九ヶ（箇）」までの指南を許されている。次いで翌永祿九年（一五六六）五月に、上泉伊勢守秀綱改め信綱が柳生新左衛門尉に与えた「新陰流」の目録には、まず兵法の起源から当流の成立事情を述べ、「予、諸流ノ奥源ヲ究メ、陰流ニ於テ、別ニ奇妙ヲ抽出シ新陰流ト号ス。予、諸流ヲ墜セス、而シテ諸流ヲ認メズ、寔ニ魚ヲ得ルニ筈ヲ忘ルル者ナランカ、然レバ諸流ノ位、別ナキノミ。…」（原漢文、以下同じ）と流派に拘らず流派を越える心境をうたい、次いで「誅龍劍ハ蛇ニ揮ハズ、且ツ又懸待（待）表裡ハ一隅ヲ守ラズ、敵ニ隨ヒテ転変シ、一重ノ手段ヲ施スコト、恰モ風ヲ見テ帆ヲ使ヒ、兎ヲ見テ驚ヲ放ツガ如シ。懸ヲ以テ懸ト為シ、待ヲ以テ待ト為ス者ハ常ノ事ナリ。懸ハ懸ニ非ズ、待ハ待ニ非ズ。懸ハ意待ニ在リ、待ハ意懸ニ在リ。牡丹花下睡猫兎、学者、此ノ句ヲ透得シテ識ルベシ。…」とある。懸待の攻防、表裏の仕掛は、一辺一処に偏せず固執せず、龍を誅する剣をもつて蛇に揮うが如きをせず、あたかも風の向きを見て帆を操る水主の如く、兎の動きを見極めて鷹を放つ鷹匠の如く、敵の動き働きに應じて自由自在に変化する妙を伝えている。これをもつて「円転」と称した所以は、まさにこの心法にある。そしてこれを一括して「牡丹花下睡猫兎」なる禅語（つまり牡丹の花にたわむれている蝶を捕らえんとし、睡ったふりをしてその機を窺う猫）を挙げ、「学者、この句を透得して識るべし」と諭している。

この後に「燕飛ハ懸待表裡ノ行、五箇ノ旨趣ヲ以テ簡要ト為ス。所謂五ヶ者、眼・意・身・手・足ナリ。猿廻ハ敵ニ隨ヒテ動揺シ、弱ヲ以テ強ニ勝チ、柔ヲ以テ剛ヲ制スル者、学者ニ伝付スルハ舌頭上ナリ。…」と、個々の太刀技を遣う心構え・心得（心法にかかわるもの）を伝えている。「史料」によれば、以下に「絵目録」六枚が入り、「山陰」（燕飛太刀第三）、「月影」（同四）、「浦波」（同五）、「浮舟」（同六）、「獅子奮迅」（燕飛太刀附隨の極意太刀）、「山霞」（同前）が挙げられているという。

以上、上泉伊勢守秀綱（信綱）が柳生新左衛門尉（のちの宗厳）に与えた印可状・目録の内容を考察してきたが、ここで最も留意すべき重要なことは、第一に、流祖秀綱の「新陰流」において、既に当時世に行われていた流派の峻別を否定し、「魚を獲るに筈（細い竹を編んでつくった魚を捕える道具）を忘れた者」の如しとたとえていること、したがって、流派に拘っているうちは真の剣法の極意を得ることができないことを示唆していること、第二に、秀綱の極意剣が「円転」と名付けられていたように、懸（攻）待（防）や表裏という仕掛・手だても、その定義に拘泥し固執しているうちは極意に至らず、敵の心気手足の動き働きに應じて、懸待表裏も自由自在に変化し転化しなければならぬ、そのた

めには禪の「牡丹花下睡猫児」をよくよく透得せよと教えていること、第三に、流祖の創始した「新陰流」自体が極めて心法を重視し、それに傾いていたため、「柳生の新陰流」が益々その傾向を強くしたことを、予見せしめる、等々である。

このような特性をもった「新陰流」が柳生宗厳によってさらに技法・心法ともに工夫錬磨を加えられ、ついに子の宗矩に至って兵法伝書として完成されたのが、いわゆる『柳生新陰流兵法家伝書』で、秀綱以来の伝授とは別に「習之外之別伝」を加えて、文字通り体系的に構築された秘伝である。⁽⁸⁾

ところで、この「家伝書」の構成をみると、大きく分けて「進履橋」「殺人刀」「活人剣」の三篇から成っており、「活人剣」には「無刀の巻」が含まれている。宗矩が寛永九年（一六三二）九月にこの「家伝書」を完成したとき、その後書きに次のように記されている。（なお、この部分だけ漢文で書かれているが、それを訓読すると以下の通りである。）

兵法の書一卷は、進履橋と名づく。おおよそ目録なり。亡夫但馬守宗厳、上泉武藏守秀綱より直伝せらるる所なり。右の目録の分、相窮める人に於いては、右の本書一卷を書写してこれを受け、相伝の証と為すべき者なり。今この上下両巻は、習の外の別伝なり。亡夫一生この道をもつて、寝食の間もこれを忘れず。故にこの道において妙理を得れば、平生予を左右に置きて、妙を談じ玄を説く。聊かも聞き得たることあるときんば則ち拳々として膺に服く。予人と成り、手に刀柄を握りて父の業を継ぐと雖も、未だ曾て自由を得ず。漸く知命の年を過ぎて、此の道の滋味を得たり。一件の理を得る毎にこれを記す。積んで多端に渉るも、窮まる所は一心に帰し、一心多事に渉り、多事一心に収まる。畢竟茲に在り。今これを書して両巻と為し、并せて本書共に三巻、以てこの家に遺すと云ふ。⁽⁹⁾

これによれば、「進履橋」一卷は上泉秀綱の直伝によるもの、「殺人刀」と「活人剣」の二巻がいわゆる「習の外の別伝」、つまり柳生父子の工夫考案に成る独自の兵法伝書であることが明記されている。さらに詳しくみれば、「新陰流」の相伝については、「進履橋」の目録に記されている事項を窮め得たものに、これを書写して授け、相伝の証とすべきことが示され、柳生父子による剣法の秘密は「習の外の別伝」として、柳生家に（あわせて三巻の形で）相伝されることとしている。このことは、「進履橋」が目録的なもので部外者がみても「口伝」を知らぬ限りその内容が殆ど不明であるにしても、「新陰流」の直伝源流に当たるものとして相伝させることを意図したものと見える。それに対して、「習の外の別伝」は、剣の心法・技法の個々については、のちに宗矩の嫡子十兵衛三藏の著している『月之抄』、『拙聞集』、『武藏野』等の解説的記録による

なければ理解できないにしても、相当に分明に記述されており、ここにいわゆる「目録」と「口伝」による相伝から「家伝書」への移行形成過程をみる事ができる。秘伝が秘伝として「唯一人」にのみ相伝される定めはあったにしても、それが文字によって内容の相当部分を伝えるようになったことよって、『兵法家伝書』の文化的価値が附加されたのである。

右に引用した「後書」で重要なことをさらに付け加えれば、第一に、亡夫宗嚴が永祿八年（一五六五）三八歳のとき上泉秀綱から「新陰流」の奥儀を相伝されて以来、生涯をかけて寝食の間も忘れずに工夫考案をしたこと、第二に、宗嚴はそれによって、恐らく（否、事実具体的に）秀綱の伝えたもの以上の「妙理」を得て、その「妙」と「玄」とを宗矩に説いたこと、第三に、他方、子の宗矩はその「妙理」をいささかでも聞くことあれば、日常にそれを拳々服膺し、体得に努めたこと、第四に、宗矩は父業を継ぎ、漸く五十歳を過ぎて「この道の滋味」を得、「一件の理」を得るごとにこれを書き記したこと、第五に、自分が父の教えと自修によって得たものは多端に渉るが、要するにその窮まるころは「一心」に帰すると悟ったこと、等々である。したがって、のちに解明しなければならぬことは、この文にみえる「妙理」とか「玄」といわれるものは何か、「この道の滋味」とは何か、また「一心に帰す」と記している、その「一心」とは何か、についてである。

さて、右にも述べたごとく、宗矩が「この道の滋味」を得たのは「知命の年」を過ぎてからであり、父宗嚴はすでに死し（七八歳、慶長十一年、一六〇六）、元和七年（一六二二）、五十歳にして三代將軍家光の兵法師範となった頃である。それから十年余を経て、寛永九年（一六三二）九月にこの「家伝書」が完成した。父宗嚴の遺したものは殆ど「目録」で、若干の説明を加えた、いわば「伝書」と「目録」の中間的なもの（「進履橋」のごとき体裁をとる）といえる。宗矩の作成に関わるものも、元和四年（一六一八）十一月、肥前佐賀藩主鍋島勝茂の子三平に授けた「見の巻」「観の巻」「切合極意」が現存資料の上では最初で、その後の宗矩の授けた「伝書」には次のものがある。

- ① 『新陰流兵法円太刀目録』 元和八年（一六二二）五月¹⁰
- ② 『兵法截相心持の事』 元和九年（一六二三）二月
- ③ 『新陰流兵法心持 外の物の事』 寛永三年（一六二六）三月

これらは、將軍職についてからも（覬職は一六三三年）依然として剣法に執心し熱意を示す家光に將軍襲職前後に呈上したもので、①を除いてかなり詳細な伝書の形をとっている。しかし、性急な家光は次々と柳生家所伝の秘法を要求したと見えて、これら三書はまだ途中未完成のもの

であった。右の②の後書きには、「兵法心持、親の参らせ候者、相伝え候通り。愚意に及ぶ所は、三卷の巻物にし、上り申し候。此の余は忘る儀あり、御心持に叶はざる儀御座候て、御尋ねに於ける者は、近々申し上げるべく候。今日まではこれより外は残し申さず候事、起請文を以て申し上げ候。偽りこれ無く候。」(原漢和混淆文)とある。文中に「親の参らせ候者」とあるのは、父宗嶺相伝の「目録」形式に盛られた事項とその内容であろう。また「愚意に及ぶ所」とは、宗矩の記述したいわゆる「心持」Ⅱ心のあり方で、技法と心法の密接にかかわる詳細な内容である。

また、③の後書きにも「右兵法の習い百十一ヶ条書し上り申し候。これより外は毛頭も残し申す儀御座無く候。誓紙の儀は別客に上り申すべく候。三卷の巻物の通り、今日迄の工夫・習い、この外は覚え申さず候。この心にて仕事に御座候間、悪しく候はんも存ぜず候。又及愚意致す所はこの習いにて御座候。これより外は存ぜず候間、然るべき様に御披露願うべく候。」(原漢和混淆文)とある。両書とも酒井讃岐守を通じて家光に呈上したもので、三年の間を隔て、それぞれの時点で「もうこれ以上の秘伝はありません。これつきりです。偽りはありません。」「今日までの工夫、習のすべてでこれ以外はありません。この心持ちでやれば間違いはないでしょう。私もこのように考えてやっているのですから。」と、ないものねだりの駄々っ子を諭しているような家光への口上が面白い。しかし、②と③では、実際の内容において、後者が前者よりも一層詳細・長文のもので、刀法以外の武器の操法に及ぶ「外の物の事」が加えられてあり、②を呈上した後書きにも「(多分心法に関するところで、ろう)お尋の件は近々申し上げたい。」とあるように、③はさらに新しく工夫考案されたものを附加し、整理し直したものである。そして、これらの伝書の作成を踏まえ、③を家光に上呈してのち、さらに六年の歳月を費やして『柳生新陰流兵法家伝書』が初めて完成したのである。

なお、柳生新陰流の『兵法家伝書』の成立過程に関する歴史的考察については、渡辺一郎氏の前掲論文に詳論されており、また今村編前掲書の「総説」にもそれが触れられているので、本稿では「序」の趣旨に沿い、むしろ兵法伝書に録された心法と技法を中心とした思想内容を、できるだけ系統的・体系的視点から考察することとし、歴史的経緯に関する事柄は、『玉栄拾遺』等の史料を必要に応じて検討するに止めた。

そこで、いわゆる『柳生新陰流兵法家伝書』が完成するまでに、前述のごとく伝書形式のものが二点(②と③)宗矩によって著録されているので、この二つの伝書を個別的に検討し、それがどのような脈絡をもって、右の「家伝書」に繋がっているかを考察してゆきたい。

二、兵法伝書における「習」の意味

われわれはまず、「家伝書」の完成に至る前の第一の伝書『兵法截相心持の事』¹¹（以下第二伝書という）における心法と技法について考察しなければならぬ。（この第二伝書は、箇条書きになっており、全体で五十二ヶ条からなる。）しかし、全体の考察の前に、柳生家の兵法伝書にしばしば「ならひ」あるいは漢字で「習」という言葉があらわれる。この語の意味は極めて重要と思われるので、これを明らかにしておく必要がある。宗矩の七男十兵衛三藏が著した『昔飛衛といふ者あり』（寛永十四年十一月）に

物ことを精しく稽古せむ人は、先、よろつの道に、初学に入てまなふへき次第をよく窮めならふべきにや。又ならふといへ共身によく熟せされは、口にいふ事はたかはされとも、そのわさを其身になすに及ては、おもひのま、ならず。又ならひのま、にする事は有れと、習の外へふみ出て、打つうたれつする時は、習の分限はみないつくともなく成て、習なき者にもうたれつなとして、言には似ぬよと人にあざけりをとる。よろつの道は初心に立かへりてよく稽古するにあり。弓射る者は的にあてむとおもはずして、唯身つくりよくかたちおして、かつて定りぬれば、後は的にもよくあたるとか。太刀つかふ事も、身つくりをよくつかむかためて、よるのねさめにつつ立て、つかふとも身つくりみたれぬならば、習をすて、無手にた、きあへとも、我刀は人にあたるへし。人の刀は我にあたるへからず。身つくりかたまらずは、定りたる手をつかふ時はちかふへからず。習をすてて飛はね跳あかり、自身をせむとせは、身つくり皆みたれて、人にうたるへし。その身作くわをよくかためむ事は、三学・九ヶなといへる数の太刀を、明暮初心に成てつかふへし。……（『史料』・下巻九七頁以下）

とある。物事を精密に稽古しようとする人は、まず、すべての道には初心者学ぶべき次第があつて、それを十分に習い窮めるべきではないか。また、習うといつても、その習うべきことをよく身に熟し着けなければ、口先では正しく言うことができても、実際に身体を通してその技を行つてみると思うようにならない。あるいはまた、習った通りに技を使うこと（場合）があつても、その習いの外へ踏み出して打ちつ打たれつしていると、習った技は皆何処かへ行き、（技を）習っていない者にまで打たれるなどして、口で言う程でもない人に嘲られることになる。すべて（技艺の）道は、初心に返つてよく稽古することにある。弓射る者は（初めから）的に当てようとせず、先ず「身つくり」（身拵え）をよくし、体形をしつかりとして、それが具合よく定まれば、その後は的を射てもよく当たると聞く。太刀を使う場合も、「身つくり」を先ず十分

にかため、就寝中、突然立ち上がって太刀を使っても、その「身づくり」が乱れなければ、習（った技）を棄ててただ無法（無手）に打ち合っても、自分の太刀は相手に当たり、人の太刀は自分に当たらないであらう。「身づくり」がかたまらないうちは、定められた刀法（技）を使うとき、それを違えてはならない。習いを棄てて飛びはね跳び上がり、自己流でやろうとすると、「身づくり」は皆乱れて人に打たれるであらう。その「身づくり」をよくかためるには、三学・九ヶなどといわれる数々の太刀（刀法Ⅱ技）を、明け暮れ初心に返って使うべきである。

以上、冗長を厭わず「習」ということの意味を把握するために、現代語訳を紹介しつつ考えてみた。「習」とは何か、「習」を構成する要素・要件は何々であるか、「習」は如何にして熟達されるか、等々の観点を踏まえて右の引用部分を要約すると、以下の通りであると思われる。

① 物事の稽古精通には、初学入門のところにある（太刀使いの）筋道・次第（順序）を十分に習い窮めるべきこと。

② それに習熟することによって、それを十分に身に着け、思いのままに為し得べきこと。

③ 習ったことの外（範囲外）においても、習が生きて働くべきこと。

④ 「身づくり」（太刀を使う身体の構え・姿勢・手足など）がしっかりと出来上がり、その姿・形も美しく整っているべきこと。

⑤ 「身づくり」は、夜半に突然目ざめて立ち上がっても乱れぬこと。（無意識のうちにも習ったことが生きて働くべきこと。）

⑥ 習ったことを棄てて、無手・無法に太刀を扱っても、習ったことが生きて働くべきこと。

⑦ 「身づくり」のかたまらぬうちは、定められた太刀の使いかた（刀法・技）を違えてはならぬこと。

⑧ 「身づくり」をかためるには、初心に返り、明け暮れに三学・九ヶなどの数々の太刀技を使うべきこと。

これによって明らかかなように、「習」とは、単に剣術の稽古をしたり、太刀技を覚えたりすることではなく、初学入門時における基本的な剣の筋道や次第を十分に窮め習い、それに熟達して身につけることにより、習ったこと以外でも、また何時如何なる場合にも、太刀使いの構え・姿勢・手足などが生きて働くようになり、さらには無意識のうちにも自然に太刀が使え、「身づくり」もかたまっていて、適正に生きて働くような境位を意味しているといえよう。そしてそのためには、相伝されている太刀技を、常に初心に返って明け暮れ稽古し、同時に「身づくり」をかためよと、特に初心に返って稽古すべきをくり返し説いている。

十兵衛三藏は、右の引用の直前に、物事の稽古精通について、次のような具体例を挙げている。昔、飛衛という弓射の名人がいた。紀昌とい

う者が射を学ぶことを請うと、飛衛は、「まず瞬きをしないことを学べ、それができるようになったら我にいえ。」と。紀昌はそれを二年間学んだところ、目尻に錐を突き立てられても瞬きをしなくなった。飛衛にそれを告げた。飛衛はまたいう。「至って小さな物を見て、直ちにそれを大きく見る術を学び、できるようになったら我に知らせよ。」と。紀昌は一匹の虱を髪の毛にくくりつけ、これを窓際につるして十日ばかり見つめていると、その虱が蟹のように見えるようになった。三年これが続けたところ、虱は車輪のごとく大きく見えるようになった。そうすると、他の小物も丘や山のごとく見える。これを報告すると、飛衛は初めて射法を教えた。のち、紀昌が窓につるした虱を射たところ、虱の真中を射切って半分は落とし、残余はそのままつるされていた、と。⁽¹²⁾

中国明代の李呈芬の著する『射経』の「眼法」を引用して説く三蔽の意図は、とかく技法というものは、入門の初めから直ちに技術を教えられそれを稽古するものとの常識観念を打ち破っている。技芸の稽古精通には、何よりもまずその基礎となること、射でいえば瞬きをしないこと、遠方の小さなものを大きく見ることがその基礎で、これらの修練体得を経て初めて射技が教えられることを説く。柳生の剣法では、先の「習」に関する所説にもあったごとく「身づくり」に相当するものである。「習」という概念が、初学入門時に与えられる筋道や次第・順序の習得、さらには「身づくり」をかためることを具体的な基礎としながら、それからの応用自在、熟達精通までも含むものであることが、右の飛衛射の姿勢からも伺われるであろう。三蔽が『月之抄』（『史料』・下巻五九頁）の中で、「習ト云習之事」について、「父云、是ハ面白キ習也。習と云ハ、年フルヲ以テ、習トス。……」と、父宗矩の言を引き、「習」は年功を積んで初めて「習」といえるのだという意味のことを記しているのは、今まで述べて来た「習」の本質を衝いたものであろう。あるいはまた『月之抄』の「稽古之心持之事」において、次のようにいう。

父云、仕合ヲ重ヘからず。おしヘヲまもり、ツ、シミヲ可^(ママ)得心^(ママ)。動キハタラクニ随フ心得專ナリ。亦云、所作より目付、目付より習之心持に入ナリ。此理ヲ学テ、心ヲ知ル。心之チリヲ去リ去リテ、至極西江水一ツに寄スヘシ。自由是より取テ出、奇妙ふしぎ可^レ有也。亦、初心ノ兵法も乗ル心アルハよしト云々。亦、初・中・後之けいこ至り、習ヲ知リテ、シロウト、仕合シテ稽古トすへし。初・中・後三段、習ヲ未^レ極メシテハ無用也。稽古のびざるものナリ。⁽¹³⁾

これによれば、仕合を重視してはならない、心に慎んで教えを守る、相手の動きや太刀の働きに随う心を専一にせよ、と父宗矩の教えを記したのち、「所作より目付、目付より習之心持に入ナリ」と続ける。「所作」は自己自身の身のこなしで、その次には相手に対する「目付」、つまり

二星・嶺谷・遠山の三つの「目付」によって、相手の身体や太刀の動き働きを見極める稽古に入り、「目付」の稽古が終わったところで、「習之心持に入ナリ」という。これは、「目付」までの稽古を自身に習熟するまで行い、十分にそれが身につくように修練すべきであるとの心構えを持つことを教えたものであろう。

そして、この道理を学んで、初めて剣法の心がわかり、その心を純化するために、わが心の塵をすべて拂い去って、遂に「至極西江水」、つまり、石火の機を窮得することに一心を集中せよという。かくして、臨機自在の境位が得られ、身心の自由を得て、自己の剣法を意識するとならないとにかかわらず、十全に發揮することができ、言葉で尽くせない「奇妙ふしぎ」が生ずるといふ。また引用文の末尾では、「初・中・後之けいこ至り、習ヲ知りテ、シロウト、仕合シテ稽古トすへし。初・中・後三段、習ヲ未極メシテハ無用也。」とあり、「習」とは初中後三段の稽古に習熟することを意味し、それができてから素人と仕合稽古をせよ、この三段の「習」に熟達しなければ「稽古のびざるものなり。」といっている。これらは皆、父宗矩の語ったことを敷衍したものであるが、いずれも「習」ということが単なる初心者稽古であったり、太刀技の基本修練のみでなく、初心入門から心法・技法の基本を稽古錬磨して、それに習熟する境位に至り、そして遂にその「習」を離れ超え出ることも意味していたのである。

三、「第一伝書」の整理解説と考察

以下では、「第一伝書」たる『兵法截相心持の事』を具体的に検討する。そのためには、まず何よりもこの伝書に書き記されている極めて難解な一字一句に至るまでの文言の意味内容をできるだけ正確に解説することとする。そもそも、本書のタイトル『兵法截相心持の事』とは何を意味するか。「兵法」とは、従前は戦闘における諸武具の使い方の意味するとともに、さらに大きな兵を動かして闘う戦術・戦略をも含んでいた。柳生新陰流では、「兵法」というとき、「人と我と立あふて、刀二にてつかふ兵法は、負も一人、勝も一人のみ也。是はいとちいさき兵法と勝負ともに其得失纒也。一人勝て天下かち、一人負けて天下まく、是大なる兵法也。……」（「家伝書」とあって、小さき兵法と大なる兵法とに分け、両者は相通ずる、つまり小さき一対一の刀二つの兵法は大なる兵法に通ずるといふ兵法観であった。しかしそれは、「家伝書」として完成されたものの中で両者が兵法として位置づけられているのであって、それ以前の、これから検討の対象とする「第一伝書」「第二伝書」では、

兵法は、主として一対一を基本とする立相の場の刀法(技法)と心法を意味していた。そして、その中に、あるいはそれに附随する形で、他の鍵(槍)・小刀・長太刀・十文字等々の武器に関する技術・技法が含まれていた。その一例が、「第二伝書」としての『新陰流兵法心持』に附せられた「外の物の事」である。「第一伝書」にも若干含まれている。

さて、論述を戻して、「第一伝書」の「截相」とは、文字通りの一対一(ないし一対複数)の、太刀による勝負である。そこには当然太刀の用法、即ち刀法が含まれる。そして、次の「心持」がここでは重要である。この語は、あらゆる所で様々な意味に用いられるが、あらかじめその含意を明らかにすると、太刀を使って相手に対するときの「心の持ち様」「心の在り方」「心がけ」「留意すべき事」「心のおきどころ」「心がまえ」「心及び気の働き方、働かせ方」等々の意味を含んでおり、最終的にはその「心持」とは、いわゆる「心法」という言葉に帰せしめられる、心の理法ということになる。

そこで、以下の「第一伝書」の解読考察に当たっては、右の如き心の浅深様々の働きの意味合いからして、各条は「心持」のどの側面を述べているか、分類整理をして、本書における心法論を明らかにすることに努めたい。さらに本伝書各条の解読には、特殊専門用語を三蔵の記録した諸著述を用いて理解することがある。

(1) 兵法の「習」の基本を心得る事(第一条―第四条)

兵法の「習」には色々あるが、次の事以外に必要はない。

- ① 相手が打って出るところを打つか、
 - ② 打って出ない相手には、当方が仕掛け、相手が動かされて打ちに出るところを打ち勝つか、
 - ③ それを知っている者には、当方がまず打ちを見せて(誘い)、それを相手が打つところを、打ち勝つか、
- この三つに尽きる。この他にはない。勝つところはこれのみだと知る、知るからこそ、当流では太刀の構えを必要としない。構えがなく、わが心の内に打とうと思うところを相手に見せない、相手に見とられない。他意なく何もしないようにすることが、当流の構えである。

(2) 立相の心構え(第五条―第八条)

- ① 太刀の構えを習うと、そればかりを至上と心得て、これで勝つぞと心に思い定め、敵(の心や動き、太刀筋)に随わず、自分の心向きだけ

で打って出ることを、当流では「ひが事」と決めつけている。

②「兵法」という文字は平と訓み、太刀の切りかけの心がけに用い、一八十の心で専一に太刀を打ち出すこと。また「兵法」の文字は、「よけはづし」と訓みをつける。相手の太刀を避け外すことが兵法である。立相の際、相手と息の合わぬ前に、(相手の)太刀の筋目を分別し、わが身がそれから外れるように、あらかじめ思っている分別に随って、その「よけはづし」をもちいるのである。

③わが身姿は真直に自然に立つのがよい。(特定の)構えも見せず、他に意うところなく、心の底だけを張りつめ、外見をゆるやかにするがよい。敵の働きに乗るためである。油断なくこの心がまえを持つべきである。

④敵の太刀さきに向かつては、身の構えは三つなければならぬ。しかけるときの心構えは三つあった。構えにはいろいろあって、三十二も必要である。しかし、当流では、三つのしかけ方があるから、構えはこれに応じて「左かまへ」「右かまへ」「むかふかまえ」(左肩をだす構え、右肩を出す構え、正面を向く構え)より他は用いない。

(3)兵法習熟の心構え(第九条―一二条)

兵法において熟達するときの心構えにはいろいろあるが、次の三つを忘れてはならぬ。

①目付には、種字種利剣。

②太刀あいには、水月。

③太刀のおさまりには、神妙剣。

「種字種利剣」とは、三蔵の著『拙聞集』によれば以下のごとくである。⁽¹⁶⁾「種字」手字」とは、敵の打つ太刀がどのように切つて来ようとも、それをわが太刀で十文字に受け合わせることで、これは決してわが身に当たらない。「種利剣」手利剣」とは、手の裏、つまり手の内のこと、相手の手の内が見えたとき勝を制せよということ。「有無の勝」というのも同様で、色に現れない、「無」のところも「有」を含んだ「無」であるから、「有」(色)に出る、現れる)をよく見て勝てというのである。あるいはまた、「有も有」「無も有」といって、「有」のところは既に色に現れているのであるからそれを見て勝ち、まだ「無」であってもその「無」のところへ仕掛ければ必ず「有」になるから、それを直ちに打てということ。したがって、種利剣はいつも「有」と見たてるのがよい。

『拙聞集』における十兵衛三藏の記録は以上の如き意味に捉えられているが、完成した『兵法家伝書』には、さらに詳しく理論的に書かれている。（後述）要するに「種字種利劔の目付」とは、立相の時の敵の心の動き、身体の動き、劔の動きの萌ないし端緒はすべて相手の手の内に現れるから、そこを見極めて直ちに打ち勝てという、最も重要な目付である。⁽¹⁷⁾

次に②の「太刀あいには水月」の項を説明しておこう。「水月」とは、『拙聞集』によれば以下のように記されている。「水月とは、敵の影をうつしたる事を申候。敵のたけを下へうつして、其積りほと間かあれハ、何程切り掛ても我身へは当たらぬと申事にて候。敵のたけ大小有レ之物なれハ、其つもり見はからい有へき者也。……」⁽¹⁸⁾と。これは現代剣道の「間合」に相当するが、柳生新陰流では、右の引用にあるごとく、立相において敵の身長を地上に影を写すように下へ移し、彼我の間合をその身長ほどに取れば、どれ程敵が切り掛かって来てもわが身には当たらぬということ。相手の身長には大小があるから、それぞれの相手による見はからいが必要であるという。また同じく十兵衛三藏の著した『月之抄』には、「老父云」と父宗矩の言として「敵ノ身ノタケ我身のタケヲ三尺の習のことく積ルナリ。是迄ハアタラヌシルシナリ。……」⁽¹⁹⁾と記されており、彼我の身長を三尺として、つまり三尺の間合に見つもと、敵の打太刀に当たらぬという。なお「水月」についても『月之抄』『拙聞集』とも、さらに詳細に書き記されている。

③の「太刀のおさまりには神妙劔」については、まず「太刀のおさまり」とは、具体的には太刀を持ったときの、とくに左の拳の在るところで（右拳はそれに添えられている）、それをもとにして太刀が使われる場所をいう。「神妙劔」とは、『月之抄』によれば、父宗矩の言として「中墨ト云也。太刀のオサマル所ナリ。へそのまはり五寸四方なり。手字手利見、水月、神妙劔、此三つハ人間の惣太体の積り、兵法之父母タリ。此三ツヨリ心持種々ニ出ル也。大形此三ツ（二）極ルナリ。……」⁽²⁰⁾とあり、『拙聞集』には「へそのまはり六寸四方を神妙劔と申候。此所をさへ、打にもうくるにも忘れねハ、負ると云事ハなく候。是に極る習にて候。目付を見るにも水月を取にも、万事に此方より用候へハ、太刀もたすにか、りても、当と云事はなきと申習にて候。比座の心持不断わすれましき事第一の心持候。」⁽²¹⁾とある。「太刀のおさまる所」とは、へそのまわり五寸ないし六寸四方をいう。両書で数字が違うが大差はない。両書とも、手字手利劔、水月とともに最も大切なところで、前書には「兵法之父母」といい、後書には、打つにも受けるにもこの所を忘れなければ負けることはない、これに極る習いであるといっている。「神妙劔」についても、両書はさらに詳細に書き記しているが後述する。

(4)病気を去る事(第一三條)

病気を去るとは、「一ツにさる事、空の調子捧心、これしゅちしゆりけん、しんのくらゐなり。」と説明されている。

まずここにいう「病氣」とは、『月之抄』によれば、父宗矩の言ったこととして、「立相テ敵ノかお、敵の太刀ヲミタク、ラクスル心出ルモノ也。」⁽²²⁾とあるように、立相のとき、思わず敵の顔色(容貌)を窺いたくなり、あるいは相手の太刀を見たくなったりし、それによって敵に対し怯み臆する心が生ずることを指す。それは心理的には、明かに敵に押され吞まれる状態になるからである。したがって、「一ツにさる事」とは、『父云、病氣ノ内ヲ、動き一ツニサレト云事也。三ツノ病ヲ去テ、手利劍一ツニセヨト云コト也。……』(『月之抄』三八頁)と、宗矩の言を挙げてるように、右の三つの病気を去り、「手利劍」一つの心になって、敵の手の内を見極めようとするのである。右に続いて、宗矩が「一念ノヲコリ、着スル所、いつれも病氣也。着ヲ去テ無心ノ心ニ出ル事至々極々なり。」という言葉で三敵に遺しているのも首肯できる。「手利劍」種利劍」とは、すでに述べたように、敵の手の内を「有」と見て、機前にそこから何が出るかを観破し、相手に随って打ち勝つことを意味した。様々な想念が相手に向かって立相ったとき起こるが、それらのいずれに執着することも病氣であり、「無心」の境位こそが至極そのものとされるのである。したがって、「一ツにさる」という心持は、「一念ヲサル心ヲモ忘ヨト云心持ナリ。」と続けて述べられているところに真意が存するといふべきであろう。⁽²³⁾

次に「空の調子」については、『拙聞集』に「敵のかまへもなく、はたらきもなく、一円うこきはたらきの無之以前を我か心にしかと詰て、敵をは無とたて、仕懸るを申候。一円うこきはたらきの未初まらぬ先を取しめて置を空と申候。」⁽²⁴⁾とある。立相った相手に、(一定の動きや技を志向する)構えもなく、心や気の働きも感得されず、総じて相手に何らの動きや働きの兆もない、その「無」のところをわが心にしっかりと受けとめ、敵が「無」の状態にあるところを仕懸けて行くことを「空の調子」という。立相において、心身の動き働きの未だ始まらぬ先を取りまとめて「空」というのである。

「捧心」とは、『月之抄』で三敵が父宗矩の所説を引き、およそ次のように述べている。「捧心」とは、心の発するところを見る心である。「空」のうちからそれを見る事が肝要である。(敵の)心が見えない先に(わが)心をつけるから、見えるという。見えないから、それを見ようと思うわが心によって、それがよく見えるようになる。この「目付」は仲々思いのままにならない。しかし、それを心がけてみると、「空の拍子」、

「一つに去る事」、「動き」の三つの段階の「目付」がすべてよくできるようになるから、この「目付」を専念第一と心がけよ。心の発するところは捧心ひとつに限ったことではない。しかし、とにかく敵の心の「空」のところを兆させるために仕掛表裏を用いるのである。（機前に用いるかけひき）

そして、「観」に至れば、もはや何事も見えぬということはない。「観」は心を心でみることに、その「観」から（仕掛表裏を用いて）現れ出んとするところを「見」る、それが「捧心」ということである。（中略）

「見の目付」はそれ故、剣法習熟の至極の心持であり、逆に至極の心持は「見の目付」に極まるから、これを専一にするのである。相手を切らんとする心があれば、太刀の柄を握る。握れば腕の筋が張る。その張るところを見よ。これは容易には見難い。見難いところを是非見ようと思えば「観」に至る。というのは、目をもって見るのでなくして、目を塞いでみる心、つまり心眼という「観」である。心眼によってみるから見えるのである。心は（そのままでは）「空」である。その「空」をみるのは心である。（わが）心が（敵の）空（なる心）をみようと思うとき、そのみる働きは「観」に至る。「目付」が「観」に至れば、無のところは心があるゆえに「捧心」がみえるという。心を捧げるといふことが「捧心」である。思い始める心の兆を見ようとすれば、思い始めない以前の、無のところは心がけなければ見えない。この説もまた「是ハ秀忠公御稽古之訓ノ録ニアリ。」とある。（以上『月之抄』、『史料』・下巻三九―四〇頁）

以上、「病気を去る事」の三つの心構えについて述べてきたが、これを要約すると、①「一つに去る事」とは、「手利剣一つになること」で、それは敵の手の内を見極めることであつた。また②「空の調子」とは、敵の動き働きの始まらない以前のところを「我が心にしかと詰めて」、その「無」のところに、仕掛けて行くことであり、③「捧心」とは、敵の心の発するところを見る心で、わが心眼をもって敵の未動の心を見ること、あるいは（わが）心をもって（敵の）心を見ることで、これを「観」という。この①②③は、一見同じような心持、つまり立相の時の心の持ち様、心の状態をいつているようであるが、十兵衛三藏は、父宗矩の言として「父云、一つに去目付ヨリハ空之拍子ハヤシ、空ヨリハ又捧心はやき也。然ル後に一つの早き捧心ヲ心かくるにより、シソソンジテハ空エアファカ、一去所へあふか也。三つのうちにてハ、た、捧心一つヲ專トせよと云心持也。…」（『月之抄』四一頁）「三つ之習之事付り一去空構心」と伝えている。つまり、①よりは②が早く、②よりは③が早いということになる。前述の次第からして、③が、心をもって心を観るのであるから、たしかに立相の場において最も時間的に早い心の構え・

在り方を示しているといえよう。

留意すべきは、①↓②↓③と、いわば浅い目付から深い目付へと順序立てておき、窮極的には「一つの早き捧心ヲかくる」ことを専心第一とせよと教え、それを心掛けていれば、たとえその「捧心」を仕損じて、「空の調子（拍子）」には間に合うか、またはさらに遅れて「一つに去る」手利剣（手の内を見極めるといふ）には間に合うだろう、と述べている点である。「目付の心持の次第」は「病気を去る事」に絡んで、かくも精密に研究され、わが心の働きの時間的順序づけまでもなされていたのである。この項の末尾に「是ハ上中下三だん也。上ヲ思ふ心也。下はラノヅカラナル心也。目付の心次第々々こまかに見あげたる心持也。」とあつて、立相時における心理Ⅱ心持のうちで、「捧心」を最も重視する所以、およびそれによつて中下の「空の拍子」「一去」にかかる心の働きは自然に継起的にできあがることを明らかにしている。⁽²⁵⁾

(5) 懸待に心得べき事（第一四条）

截相のとき、あちこちに心を動かして迷うのはよくない。最も心がけるべきは、

①急に懸^かつて打つか、足と身を懸りにして打たぬか。

②心と身を待（相手の攻めを待ち防ぐ心構え）にしておいて、打ちかかるか、待にして打たぬか。

この二通りである。待にしてわが太刀を打ち出ださぬは（敵の）動き働くのを「待つ」ことだと心得べきである。

(6) 水月と懸待の關係の心得（第一五条〜第二八条）

①水月（の間合）を取らない前に、急に懸つて打つ者に対しては、（当方からは）懸らない（攻めて出ない）。敵の懸りを受けとめ、神妙剣、つまりわが太刀を中墨におさめて、（敵の先を待つ心で）待にして打つべきである。

②水月（の間合）を取ろうと思ふところを急に打ちかかる者があるとき、わが方の心の油断から打たれることがある。それ故、水月の構えに
おいて、わが心の下作^{したぐり}をして、つまり諸事万事に油断なく心を配って、

⑦ 水月より前に懸つて打つか、

⑧ 水月を取るところを仕掛けて打つか、

⑨ 待にして全く打たないか、

③この三つを予め心の下作したつくりにしておくこと。水月を取るには、油断なく心をつけて取ること。このとき、急に懸って打つ敵には、その太刀を受け外すか、一足（左右に）開いて打つのがよい。このように敵の打ち出すところを待にして、自らは懸らなければ、無刀にて敵の太刀を取ることができる。総じて、水月を取ろうとするところを、心の油断によって打たれ怪我をすることがあるから、十分に心を配り思いを詰めて水月を取ることが肝要である。

④水月を取っても、自らは打たずして敵の働きを見、いかにも待に構えていながら仕掛けていく場合には、「表裏むかひ」、つまり心を隠し敵をたばかる心をもとにして、⑦「敵の気心の兆すところ」、①「敵の打ち出すところ」、②「全く思いもつかぬところ」、⑤「敵の心身の動きの留まるどころ、固まるどころ」、④「敵が急に懸ってくるどころ」、この五つを打つべきである。

敵の気心の兆を見る目付は、手・足・身・眼の動きのほか、わが心をもって敵の未動の心を観破する「捧心」をもって見ること。そして、それらにわが心が気付いたとき、自ら仕掛けて打つこと。

⑤立相った敵が浮き立ち、水月を取ろうとしても取れないようにするには、（当方が）軽く働きかけるのがよい。そのときに、急に仕掛けると、余されて打ち損ずる事が多い。そのような敵には、相手を留まり固まらせるように仕掛けて、その固まり留まるどころ、その拍子（心・所作）を捉えて勝つべきである。

⑥敵の気心の兆を直ちに打つのはよくない。兆を見つけたならば、その兆の拍子にわが身を乗せかけ（敵の兆す心の位に合わせて、一つになり）、太刀をひかえて（心を待の位に置き、敵の心を受け取った心持で太刀を打ち出して、という意味）打つのがよい。

(7) 「表裏むかひ」の仕方（第二九条―第三五条）

「表裏」とは、敵との立相におけるかけひき、はかりごとで、機前の手だてをいう。「むかひに迎」とは、一般には仕掛である。「月之抄」

『史料』・下巻四〇頁）には、

父云、これ当流之心持大事也。センノセント云仕掛是ナリ。表裏ノ道ヲ不レ知ハ成間敷也。互ニ習ヲ知り、センヲ待チ、道理に叶テ勝事本意トス。夫ヲ仕掛テ我センヲ迎ト云也。惣別表裏ヲ專として、道理に叶事肝要也。道理ヲ知テモ表裏不レ知ハ不レ成也。表裏ヲ知テモ道理ヲ不知ハ成間敷也。仕掛ル所迎ナリ。空之位懸ナリ。

とある。先の先という仕掛を「迎」というが、それはどういう道理か。まずこの「習」を知っている（習熟している）者同士の立相では、互に相手が先を取ること待っている。つまり互に先の心でいる。それを当方がさらに仕掛けて先を取ること、それを先の先という。故に、先も、先の先も、すべて表裏である。表裏の道理、仕掛の道理がそこにある。表裏ということを知っているも、ただ敵をたばかり、掛け引きをするだけで、表裏一迎の仕掛の道理を心得ていなければ成功しないし、反対に、その道理を知っているも、表裏・掛け引きの実際を知らなければ成功しない。兆以前の「空」の位における仕掛がこれである。

①水月の位（適切な間合）を取り、敵の太刀が直ちに当たらぬところをわきまえて表裏をしよくする。表裏の種々の手だてを行う（仕掛ける）については、相手の心を次第に責め立て追い詰めて行き、その窮たところで、やや（時間的な）間をおいて勝を制しようとするならば成功しないことはない。「むかひ表裏」は、要するに仕掛であつて、仕掛けるときの心の持ち方は敵によって異なる。仕掛ける味も敵を留まらせるためである。²⁶

また、相手に油断がないときは、表裏を強く仕掛けて詰めれば、やがて狼狽して全く取乱した状態になるものである。「二目遣」「色につき、色に随ふ心持」を専一に用いるべきである。

「二目遣」とは、「家伝書」には「待なる敵に、様々表裏をしかけて、敵のはたらきを見るに、みる様にして見ず、見ぬやうにして見て、間々に油断なく、一所に目を、かず、目をうつしてちやく／＼と見る也。（チラツチラツとすばやく見ること）」とあり、（岩波版『近世芸道論』三一頁）また『拙聞集』には「敵の心かけのそむ所をねくれかけ切らせて勝事にて候。身を明てハ、うけ一ツにきはまり候心持にて候。又曰、二目遣とは、初見たる所にて、つまりたらハ、其を見かへて仕掛れハ、くつろきか出来ると申おしへも有之、……」（『史料』・下巻八一頁）とある。これを要するに、敵と立相のとき、相手が待に構えていて動きがない場合には、種々の表裏を仕掛けて、敵の心が動き始める、そのところを、一所に目を付けず、着せず、目を移して目付を変えて見ることをいう。あるいはまた『拙聞集』（前引）にもあるように、初めの仕掛によって敵のはたらきが見えても、それが固定しそうになつた場合は、目付視点を變えて仕掛けると、「くつろぎ」、「つまりゆとりができて一層相手の働きがよく見える、という。

「色につき、色に随ふ」については、まず宗矩の著した『玉成集』第一（正保二年五月、一六四五）に

此習無時に打掛る者ハ是に不_レ及、かまへなど色々（つぎ）に仕、待にして打出さず、ハたらきを見てかまへてゐるものによき也。さ様の者ハ、先々三寸の所へきりかけて、色々はたらき仕掛けて表裏行をまハして夫に隨きり出し、夫に隨はつして勝へし。太刀のかまへハ、何様にかまへきり出すへきも、我かま、なる物也。太刀は心次第敵に隨物なれば、数しらず。：（『史料』・上卷三四三頁）

とある。要点は、以下の通り。①色々な構えを取り、待にして打ち出すことなく、（当方の）働きを逆に見て構えている者に適している。②このような敵には、その太刀先三寸の辺りへ切り掛け、且つ色々な働きを仕掛け、表裏をめぐらし、それに隨つて相手の心が兆す所を切り出し、あるいはその兆に隨わないで勝つこと。その際、太刀の構えはどのようであつても切り出して行けば自在にできる。

次に『拙聞集』の「色に付色に隨ふ事」の項（『史料』・下卷八一頁）には次のように見える。

待なる敵に能く候。或ハ又はたらきのこまかなる敵にも用ゆる習にて候。左様の者にハ先三寸に切掛て敵のはたらきに能（た）したかつて勝つ事を云也。乍_レ去諸作の色に付てハ勝心持は悪候。捧心を能見て其志にしたかつて勝心持能候。此習ハ少も我をたてず、能敵にまかせた位にならねハ、色にしたかふ位へは行立（やくだ）不_レ申候。敵の色は我より出すと思ふ心持第一にて候。敵の色の替にしたかふ心は跡につく程に、我色に敵を付て、其敵の色にしたかふて勝と申事にて候。色につきと云と、色につくと云とのかはりめにて候。いかさまにもかるき諸作なふしてハ、此はたらきは不_レ可_レ成候。又ハ敵によるへき事也。色と申候ハ敵の心のはつする所、ぬくる所、てんする所、何れにても心指のかはりめを色と申候。色につくと申候所を大事にいたす事にて候。

この説明は、宗矩・三敵の記録した著作の中では、最も精細なものであつて、完成された『兵法家伝書』にもこれほど詳しく述べられていない。そこで以下に、右の説明の要点を箇條的に整理してみよう。

1. 待の位にある敵、（心・技・手・足の）所作（した）を細かにする敵に用いる「習」で、かかる相手に対しては、その太刀先三寸のところに切掛けて、それによつて生ずる敵のはたらきによく隨つて勝つことをいう。
2. しかしながら、相手に兆す諸々のはたらきの「色」に、直ちに付けて勝とうとする心持はよくない。
3. 敵の心の動き兆す以前の空のところ、即ち「捧心」をよく見て（観の目付）、相手の志、つまり心の動き行かんとするところに隨つて勝つという心持がよい。

4. この「習」は、いささかも「我」を先に立てず、よく敵にまかせた位（心のうち。未動・已動を含んだ心の境位）にならなければ、「色に随う位」には到達できない。

5. これを立相の場といえ、敵にあらわれ兆す色は、わが方から（仕掛けて）出させる———と思ひ定める心持、つまり「先の心の位」が第一に大切である。（注（27）参照）

6. 敵の色の変化にだけ随おうとする心では、すでに敵の「跡」について（後の位になって）しまう。故に、当方の先（攻め・仕掛）の位によってあらわす色に、敵を（引き）付け、それによってあらわれる敵の色に随つて勝つということである。

7. 「色につき」というのは、敵のはたらきのあらわれ兆すところに、つき随うということ。「色につけ」というのは、当方のあらわす色に、敵を誘ひ引きつけること。「かはりめ」とは、敵が当方の色に誘われ引きつけられ、心が変り動いて、己れの色をあらわすに至る、その変り替るきわ（際）のこと。（その「替（変）り目」に随つて勝つということ。）

8. この「色につき色に随う」というはたらきは、当方の心身の軽い諸作がなくては成功しない。

9. 「色」とは、敵の心の発するところ、（当方の仕掛けに対して）抜くところ、転ずるところなど、いずれにしても敵の心の動き行くかわり目をいう。

10. 大事にいたすべきは、「色につけ」ということ。『月之抄』に録せられた宗矩の教えをみると、「色につけ」について次のように説明している。「先の心の位」で、敵の太刀先三寸へ切り掛けるなど、色々の仕掛け、切り掛けをすること、（当方の）色という。三寸のところへ仕掛けても（当方の）色がつかない敵には、さらに敵の拳の辺りへ深く色を仕掛けてみよ。そうすれば（当方の）色につかないということはない。敵が当方の仕掛けた色につけば、（敵の心が替り動いてあらわすその）色に随つて勝つのである。（『史料』・下巻二〇頁）

②仕掛けの手だては色々ある。右のことを互いに知っていても、なお且つ手だてを如何にするかを専一に思うことが肝要である。手だてはかへひきである。これは、待の位で打ち出さず、（当方の）切り出すところを見ている敵に仕掛ける方法である。

③敵の気・心の兆すところを知れば、右の「表裏」「迎」の仕掛の区分に應じて、今まで述べた目の付け所は見えるものである。仕掛け次第

によるのであるから、どのように仕掛けて行くのか、というわが心の思慮・判断が肝要である。

④ 敵の打ち出すところを打つという心持は、敵の打つに打たれ、打たれて勝つことが専一である。（相手かまわず）われとわが身を使う兵法でなく、敵に使わせて勝つことが肝要である。⁽²⁸⁾

⑤ 「思いつかぬところの心持」としては、立相せぬ前も、水月の間合に入らぬ前も、全く掛わり合わぬ前から、敵に対して心を付けて置くことが第一の秘事である。

⑥ 五つの位（神妙剣、水月、身の懸り、左足、捧心）が備わっており、敵の固まり留まって待っている者には、仕掛けるとき病気を忘れず、一つに捨て去ること。神妙剣に太刀をおさめ、観の目付で、何物にも心をそらさず、ただ一筋に仕掛ける。いささかも疑心もなく、筋道通りに立ち行けば、不動の心で先の先を取って勝つものである。「表裏」「迎」に当方から仕掛けて敵を責め詰めて勝つのも、その時の判断次第である。

⑦ 水月（の間合）を取る前に、十分に心の下作（油断なき心構え）をし、敵の様子を見ることが肝要。水月を取ることのみわが心を奪われると、敵の打ち出すところがわからない。仕掛けんと思う心ばかりで、敵の仕掛けるを知らない。打たんと思うばかりで、敵のはたらき（所作）を忘れ、行き掛って止まり、仕かけ直すことを忘れ、（間合）遠いと思つて近くを見ない。敵の動き・働きに紛れて、太刀の間合を知らない。（観見の）目付（で見取ったところ）を打てばよいと心得て、敵の変化を見ない。わが目付に眼をとめ過ぎて、己の所作の固まるをも知らない。かように（心でも眼でも）見損う故に、立相の次第には、（敵が勝つか、己れが勝つか）不同である。それをよく分別すべきである。

⑧ 「移すところを切る」とは、心を或る状態から他の状態へ移すところを切ること。その場合の掛り行く心得は、敵が心を移す瞬間、他念を一挙に去って、相手の動きを見て動くならば勝つことができる。動かす（心を移さず）待の位にいて切り出さぬ者があるが、その者に直ちに打ち出るのはよくない。そのような者には、病気を去って、わが足・身で乗り仕掛ければ敵の動きは見える。その動きに随えばよい。長い太刀で仕掛け出るときは、無理に打つもよく、小太刀・無刀の場合は、仕掛を色にし、敵の（水月の）内に入り、そこを見ようと思う心持が肝要である。

(8) 相手の違いによつて勝つ心得 (第三六条―第三九条)

① 十人の相手に別々に勝つ者はあるが、一人の相手に十度勝つことは稀である。十人は各々の心を持つ故、(各人が) 打たれることを知らない。一人の相手では一度負けると、何故に負けたかを知るからである。そこを用心するから打ちにくいのである。一度勝つたならば、二度は仕合をせぬこと。どうしても避けられなければ二度まではしてよい。しかしその時の心の持ち方は肝要である。

② 一度勝ち、二度目の仕合をするとき、その心持が前回の通りと思つて、相手の心を見ず、そのまま仕掛けるのはよくない。それで勝てると思つと負ける。二度目の立相では、まず水月をとり、旧の如く仕掛ける心で表裏を仕掛けてみれば、相手の用心し覚悟するところが見える。それをよく見て、(相手の) 用心のないところを勝つ心持が肝要である。前に敵が待の位で負けると、今回は無理にも懸になると、前回に懸で負けると、今度は懸かぶらぬものである。故に、打を変え、手だてを替えて仕掛けて勝つ事が肝要である。

③ 力が強く懸の位にある敵は、急に仕掛けてくる者と同じと心得て待ち受け、遠近の位(心及び所作において、遠くして近く、近くして遠い位どりをして) を打つこと。⁽²⁹⁾(力の) 強い者に対する仕掛は、如何にも強く見せて打ち掛け、敵に(更に) 強みを増させるよう急に仕掛ければ、のちまで強みを保つことができず、遂に油断も生じ、自分の方から倒れるものである。そこを見て勝つ心持で、気もそれに随うことを第一とする。⁽³⁰⁾

(9) 兵法は一心の働きに極まるとの心得 (第四〇条―四二条)

① 截相は、仕掛・手だてに極まり、人の気心の兆すところに随つて勝つに極まる。その兆の模様をよく分別(判断) できれば、敵が太刀を打ち出すところの分別できるはいうに及ばぬ。(敵の) 心の動き出す初めに(わが) 心をかければ、その動き働きへの目付に兼ねて油断がない故、一向に驚くことはない。われが驚くのは、心が及ばず油断があるからである。敵の油断を見つけ、(先を取つて) 仕掛け驚かせば、どのようなもわが心はそれに随い働き行くものである。

② 兵法(剣法) はわれが使うのではない。敵に使わせて勝つことが肝要。仕掛・手だては、わが身に習熟すべきこと。勝つところは敵にあり、それに思い付くのはわれである。

剣の道理(理法) も知らず、剣法にも習熟せず、ひたすら無理を押し打ち勝たんとするは素人の剣である。剣の道を知熟し、駆引き・

手だてを知るが上手というもの。互いに身につけた「習」を知り合い、心も働かず手だてなき者は負ける。兵法は一心の働きに極まる。この道の鍛錬に専心すれば、思いの外に仕掛・手だて・工夫は出てくるもの。身につけた「習」の外もそこにある。

③心は移り易きものなれば、敵の心が働き、色々に手だてを変えようと、随って心も移る。それに乗ることなく見ることなく、無念無想に敵の種利剣・捧心（手の内とそれにこもる心）を「観」の目付によって心が心を見ることに専念すれば、敵の身手足心の動き働きの万事は見えにくる。これが第一の秘事。「習」を極め、愚智に返る心持がこれである。

⑩外の物を遣う心構え（第四三条―第五二条）

① 鍵・長刀・十文字・かきやり・小太刀・諸道具ともに、以上の「習」「心持」によるのが当流。諸種の「習」はあるがこれを用いない。突かせて勝つか、突かない者には仕掛けて勝つか、の「習」以外にない。即ち、㊶掛って突く者、㊷掛って敵の働きを見て突く者、㊸待（の位）においてそのまま突く者、㊹待にして（敵の）働きを見て突く者、この四者より外にない。

② 掛って突く者は、待ち受け、敵の足を踏み出す所を見て、遠近（敵より遠く、わが方より近い位取り）に取り、わが身の位置を（敵の間合から）外して勝に出ること。掛って突きに出ない者にも、（敵が掛りの）歩みを出す所に身位を取れば同じ事である。

③ 待においてそのまま突き出す者には、そのままで勝つこと。敵の働きを見て突き出さぬ者には、身の位置と表裏（の仕掛けどころ）を、敵の鍵先からわが身まで五尺三寸に詰め、そこで位取りし、手だて・仕掛をすれば、それに乗って働きを起こす所を、「せんたん」と（相突のないよう、下からの太刀筋に対して、太刀先を上げながら）打つこと。

「せんたん」とは『兵法家伝書』（岩波『近世芸道論』三二三頁）の「殺人刀上」に「身ノ位 梅壇之心持之事」とあるように、「せんだん科」の落葉高木で香氣を發する樹木をいう。ここでは「梅壇は双葉より香し」の古諺から引いている心法の一つである。注（31）に十兵衛三藏の著した『拙聞集』及び『武蔵野』から、これに関する記述を載せてあるが、具体的に如何なる事を意味するか、これを明かにしよう。

「せんだん打込み」とは、「二葉」の心得をいう。即ち、立相において彼我の太刀筋が並び揃うことを嫌う心得である。遠近の位・心持（注三〇参照）で、太刀筋を下（段）にとりながら（敵の仕掛に応じつつ）わが太刀先を上げて打込むこと。「いろこかた」という鍵の習と同様である。鍵の突き込みに於いても、右の刀法のように「せんだん二葉」と突けば、相突はない。「せんだん」は、まず第一に相打・相突をさせない為

取る位である。心得・心構えていえば、わが太刀を神妙剣の位におさめているところに背いて、(敵の)太刀(鑓)を取り込むような道理に外れたことはしないにしても、「せんだん」は立相の敵に対する諸作の習であるから、取るべき手だては数多く色々ある。しかし究極には数多くの習はすべて打ち捨てて、ただ一つ(の位取り)がきちんと用いられるよう、その方法を教えるために「せんだん打込み」ということをいっただのである。一度習熟したもの(心法・技法)は、それを捨て忘れても、心身手足に付き備っているものである。したがって、初めから高度に精密な工夫を求めても、下段からの(太刀筋の)諸作はきちんと身につかないから、敵に勝つ(適切な切掛けの)ところへ太刀が行かない。「せんだんの打込み」には、立相の「場」、つまり立相っている敵との掛りの局面、位取りを変ええる心持が第一に必要なである。あるいはまた、簡単にいえば、「せんだん」とは、相打・相突を避け、先の太刀にて敵の両拳を打ち込むことである。

④長太刀・十文字・かきやり、短い道具はすべて同じ事であるから、右の心持で敵の働きを足身で抱え込むことを専一とする。長太刀は截る事を専ら思うべきであり、かきやり・十文字は仕掛けて、十文字を頼らない。かきやりが十文字に当たれば、そのままそれに随って勝つ。短い道具の場合、このような遣り合いを理解し、敵の武器が当たらぬよう掛り合いを判断し、敵の動きに随って打つべきである。太刀の場合と同様である。

⑤長い鑓は、長さを頼りにせず、敵の鑓との重なった間合が多くならぬよう考慮するがよい。これも仕掛は太刀と同様、敵の働きに随うこと。互いに中段の位に取った鑓は相突にならぬがよい。

(11)「無刀」の習の心得(第五二条)

①「無刀」の習とは、無理に人の刀を取る事に熟達するをいうのではない。兵法の習熟は、様々な状況の中で、敵に対してどのように適切に処理し取り計うかの諸作に熟達することであって、それは「無刀」の心得から出発するので、これを当流の最上極意というのである。諸道具を自由に使いこなすのも「無刀」である。諸道具がなくとも、兵法の用に立つものがあれば、それを考えて何でも取り上げ、自由に使いこなすのが最上であることをいわんがために、「無刀」という。相手がわれを截ろうと思つて掛つて来る場合に、「無刀」のまま敵の太刀を取るのである。わが太刀を取られまいと覚悟している者からは取るべきではない。

②截られなければ、敵の太刀を取つたも同然である。「無刀」の立相でも(截られるように仕掛ける事が第一の心得である。兵法の習におい

ては、仕掛・表裏などの所作は心から出てくるから、諸々の所作・取り計いの模様はすべて心にある。その心を心が知らないところを「無刀」という。心が出て働くところを勝ち、抑える法を当流の兵法という。その目付と習は五つにあると知るべきである。

ここにいう「五ツ」とは、『月之抄』（『史料』・下巻四一頁）に見える「五観一見之事」においては、父宗矩の記録として、神妙剣、水月、身の掛り、左足、捧心を挙げる。この五つの目付より一見と見出したのが捧心で、捧心によってすべての観を代表・集約する。つまり、敵と立相ったとき、大事なものは敵の具体的な所作が表れてからそれを見て我が身・心が応じ働くのでは遅れをとる。所作はすべてその所作を為さんとする心の働きにある故に、これに関する目付・習は、五観↓一見の捧心におくということである。心の発するところを見る心である。

③これはまた神妙剣と同じことである。

「神妙剣」とは、既に第一二条において説明したように、「中墨」であり、太刀が臍のまわり五寸ないし六寸四方におさまるところであった。しかもこれに続いて、「手字手利剣、水月、神妙剣、の三つは、人間の惣太体の積り、兵法之父母タリ。此三ツヨリ心持種々ニ出ル也。」（『月之抄』）とあった。このことの意味は第一二条関連では説明しなかつたが極めて重要である。以下に考察しよう。まず、「手字手利剣」とは、敵が太刀をどのように打ち出して来ようとも、決してわが身に当たらずに心構えであり、またそのためには、相手の手の内を見る、つまり太刀を持った掌内の働きは結局わが心の働きであるから、太刀を持つ心の有（表れたところ）と無（表れないところ）を見極めることを意念に置いていたものである。「水月」とは、立相の場における彼我の間合で、敵から打ち出す太刀はわれに当たらず、わが太刀を打ち出せば当たる距離をいう。これはまた相手の所作、心気の働きの有無、彼我の懸待の位取りにおいて異ってくる。心法上からは、この「水月」は、水に月がうつるが如く、わが心の水に敵の（心気の動きの）影をうつすことをも意味した。間合は単に物理的な彼我の距離をいうのみでなく、敵の心気身手足の動き働きのうつし取る、われの心の鏡でもあった。

さらに「神妙剣」と「水月」との関係については、

水月も是神ヨリの儀也。思ひツク心ヲ月と定、神妙剣ヲ鏡とス。夫にうつしてよりハ、勝よきもの也。人ニ大小アリ、水ノ場ヲ取時、其影ヲカンカヘシ。其場ヲ取所ヲウタツト云事なし。夫おミソンスルモノ也。フカク取テハ後へ退ク事ならぬもの也。ハツシハアサク取所ニアリ。場ヲトル所ヲウツト思ふ心ヲ、カネテ心に持事肝要也。取所ヲ切ぎるモノハ、其ま、勝へき也。懸々セン／＼タルヘシ。（『月之抄』）

とある。先にも述べたように、『水月』は、物理的な間合・間取りを意味すると同時に、心の水に敵の影（所作ないし心気身手足の動き働き）をうつす心法でもあった。故に右の引用にも、「水月」も、「神妙剣」の神（の働き）によるものという。神とは「身の内に至らぬ所もなく、行わたりて有を神と申候。此神諸作に移らすして、而も惣身に至らぬ所もなく行わたりて、有用様大事にて候。」（『拙聞集』、『史料』・下巻八九頁）とあるように、霊れた気の働きが総身に行き渡っていて、しかも未だ具体的な所作に移り現れない、研ぎ澄まされた鏡の如き心身の全体の緊張状態である。故に「妙ハ縦て申候は神の香いにて候。……神内ニ正しき有に妙外にあらはれ、内に見へる形なくして、おもはざるはたらきをなす物なりと先御心御可有之候。」（同上）とあるように、内なる神気が正しく霊れて働くとき、それが外に形をとって現れるを妙といい、内神なれば外妙なる思わざる働きをするものという。

かくして、心法上の「水月」では、諸々の意識・所作の根源としての心を月と定め、右に述べた総身に行き渡る霊なる気の集中緊張の所（臍下丹田ともいう）を鏡として、そこにうつし取ることを意味する。つまり、これを立相の場に移せば、敵の心・気の動き働きをわが心に照らして感応し、それが直ちに霊なる神の鏡にうつし取られ、妙なる剣ないし体の働きとして具現される。心気は、ここでは更に精しく、心↓霊気としての神↓妙用として働くことを物語っていると見えよう。これが「思ひツク心ヲ月と定、神妙剣ヲ鏡とス」の理法である。

右の引用文で、以下は具体的な立相の所作を述べたものである。心を通して神妙剣に敵の心気所作がうつされれば勝つことは易しい。相手には背の高低があるから、「水の場」、つまり相手との心身の間合を取るときには、敵の心気所作の現する影をうつし取れる間を考えなければならぬし、しばしばそれを見損うことがある。故に敵の影をうつし取る間合は、浅く取っておくのがよく、深く取ると敵の打ち出す太刀に随って後へ退くことができなくなる。（敵の太刀を）外すには間合を浅く取ることである。故に敵もまた自らの（「水月」の）場を取るのであるから、わが方の「水月」の間合の場に入ったところを直ちに打つと思う心構えが肝要になるのである。

以上、「手字手利剣」「水月」「神妙剣」をみてきた。これらは、いずれも、敵の心気所作の兆すところに感応し、わが心気所作を働かしめる「つもり」（心の判断ないしは心気身手足の見積り、予測、推測）といえよう。故に右引用中にも、この三つは「人間惣太体の積り」というのである。いうまでもなくこの「つもり」は、単なる計算や予知・予測ではなく、錬磨・鍛錬によって純粹に働く神気の感応であるから、「心を能きたい

て年月の稽古にて病氣ごとく去去テ神一ツに残りて六寸四方の内に留ると先ツ心得可有候。神（ハ）心を能よきたいぬいたるきすい也。」（『拙聞集』、『史料』・下巻八九頁）といわれる。稽古を長年月にわたって継続し、心を鍛え抜き、あらゆる病氣（既出）を去った生粋のものが神気である。「神妙剣」はこのようにして得られるものであるから、「目付を見るにも水月を取にも、万事に此方より用候へハ、太刀をもたすにかゝりても、当と云事はなきと申習にて候。此座の心持不断わすれましき事第一の心持候。」（同右、傍点は筆者）といわれる。「神妙剣」の習・心持が体得できれば、「無刀」で掛つても敵の太刀に截られて負けることはない。「神は縦たなて申候て、何にても多中よりえらひ出して、只一ツ残りたるものを神と申候。或ハゆうしゆうし百ひゃくきのうちより十じゅうき撰出して、十じゅうきの内よりえらひて只一いちきに究まりたるを、人の身に取ては神と申候。」（同右）とは、要するに人間の気心の働きは多様であるが、あらゆる錯雑、病氣を取り去った純粹ないし生粋の神気こそが「神妙剣」の要訣なるを説いたものである。以上の考察によつて、「無刀が神妙剣と同じ事」である理由が判明したと思われる。

④「水月」の位において、わが心の水によく敵の影（心気、所作の兆）をうつして、まず敵に截らせようと思ひ、五つの目付（神妙剣、水月、身の懸り、左足、捧心）における心の持ち方によつて仕掛ければ、（敵の太刀を）取れぬことはない。足・手・身の伴う表裏を仕掛ける心持で、十分にゆとりをもつてすれば、十人のうち六―七人、十度の内六―七度は必ず取れるものである。

⑤古来の兵法にも、股ももを截らせて首を截り、少しく截らせて多くを截るを、兵法における心の持ち方の極意としている。故に無刀において少しく截られても、敵の太刀を取るが第一の上手である。「籬はかりこを帷幄いよくの中に運はこらし、勝を千里の外に決す。」（戦略は本營の内うちで十分に練り、勝利は千里の外に決する）の主旨をよく分別し、気前きぜん、つまり気の外化して所作となる以前の、内なる気の働きこそが肝要なるを知るべきである。それは、敵に立相うとき、相手の心気手足の動き働きを分別判断する心の働きに少しの油断もないことを第一とするからである。「鷲たづな鳥の將に撃たんとして卑く飛びて翼を斂ひめ、猛獸の將に搏つかたんとして耳を弭なて俯伏し、聖人の將に動かんとして必ず黒色あり。」の心持が肝要である。

「習」（心法・技法の基本的習熟）をもととして、常に心を新たにし、気を働かし遣う兵法者が上手・上達の人である。人は生まれながらにして兵法を知っているのではない。心法・技法にわたる基礎・基本の習熟によく努めて、しかもそれを離れる心持が肝要である。これが上手・上達の人であつて、兵法修業上の心の持ち方はこれ以外にない。

「習」によく努めてそれを離れよ、とは、「身づくり」「心(下)づくり」の基本は、それに止まれば、そこに心も身も凝り固まり、融通無礙でなくなるからである。真の「習」の意味は先項でも明らかにしたように、習ったことに熟達するとともに、それがもとになって、習わぬこと・状況においても心気身手足が自在に應ずることができ、必要な技が出なければならぬことであつた。「習」を離れ、「習」の外に出るとは、このような意味であるから、「習」ということは、柳生新陰流にとって、いよいよその重要性を益してくる。「心ハ万鏡ニ隨ヒテ転ズ」ところが、真の「習」であり、「無刀」の極意であるとされたのである。

四、「第一伝書」の心法論要訣

以上、「第一伝書」即ち『兵法截相心持の事』を解説整理し考察を試みた。既に述べたように、この伝書は、宗矩が將軍家光の求めに依じて、元和九年(一六三三)の二月に上呈した最初の著述であつた。しかもそれは、新陰流が上泉伊勢守信綱から宗蔵に直伝されて以来、いわゆる「目錄」を超えて、読める文書に整え、兵法の伝書として作成したものであり、次の『新陰流兵法心持』(寛永三年三月、一六二六)を経て、完成された『柳生新陰流兵法家伝書』(寛永九年九月、一六三二)に至る最初の伝書であるという意味においても、極めて重要な位置をもつものであつた。つまり、秀綱(信綱)、宗蔵、宗矩と伝えられて来て、宗矩自身の工夫発見も加えた「第一のまとめ」の意義があるということである。

「第一伝書」の文章は平易に記されているが、用いられている数多くの語句はそれぞれいかなる剣法上の専門の意味をもち、また表現されている文意が具体的にいかなる心理・所作・手だてを意味しているか、等々を説明することは極めて困難であつた。それ故、既に読者に知られるように、筆者は、宗矩の著録した『玉成集』第一〜第三(正保二年五月、一六四五)、その子十兵衛三蔵の著した『月之抄』『拙聞集』『武蔵野』等々を検討し、それに依りながら必要な理解を試みた。

「第一伝書」には、新陰流の刀法(技法)は全く記されていない。『兵法截相心持の事』と題されているように、この伝書は、「ふくろしなない」や木刀・刃引による立相稽古の指導書ではなく、真剣を用いた截相きりあひの場における「心持」、つまり心構え・心得・心の在り方・心の持ち方・留意すべきこと等々と意味される「心法」上の理論をまとめたものである。いわば生死の竿頭ないし巖頭に立って、いかにしてわが身を守り、わが生命を全うするか——ということが、この「第一伝書」を貫く根本主意であつて、いかにして敵を截り敵に勝つかが第一要件とはされている。

ない、と理解すべきであろう。

しかし返り見れば、既述の如く、この根本精神は、流祖上泉伊勢守信綱が新陰流を創始したとき、その根柢に据えられていたものであった。即ちそれは、秀綱が宗巖に与えた「目録」に、新陰流は諸流を廢せず、諸流を認めず、いわば「魚ヲ得ルニ釜ヲ忘ルル者」の如く、流派を超えるところにその根本を置き、「円転」の呼称の如く、あくまで敵の動き働きに應じて自由自在に変化し、さらに「弱をもって強に勝ち、柔をもって剛を制す」るを極意としていた。「牡丹花下睡猫児」という禪法をよく透得せよと教えている所以である。

この精神、心法の極意は宗巖に至ってより一層深化され、『新陰流兵法目録事』（金春七郎氏勝に伝えたもの。既出）においては、「心ハ万鏡ニ隨ヒテ転ズ、転ズル処実ニ能ク幽ナリ。流ニ隨ヒテ性ヲ認得スレバ、喜モ無ク憂モ無シ。」「心地諸種ヲ含ミ、普雨悉ク皆萌ス。華性ヲ頓悟スレバ、菩提菓自ラ成ル。」という如き古い禪の偈文が挿入されていた。前者は「手字手裏見」の後に、後者は「神妙劍」の後に附されている。完成された「家伝書」において、宗矩は前の偈文のうち、前二句のみを挙げて解説し、後の二区は「略して記せず」としている。しかし、当然のことながら、父宗巖相伝のもので、右二つの偈文の主旨は宗矩において十分に心得されていた。

因みに、寛永九年九月に「家伝書」が完成、翌十年二月に記された『新陰流兵書』（『史料』・上卷三三九頁以下）には、「家伝書」にも見ることができない宗矩の本音の如き心法論が展開されており、そこに右二つの偈文が彼の言葉で説明されている。研究上の順序からすれば、「第一伝書」の心法理論は、あくまでそこにみられるものに限定し、次いで「第二伝書」、「家伝書」へと考察を進めるべきであるが、ひとつには、既に父宗巖の遺した前掲「目録」に採られていて、当然宗矩はこれを早くから心法極意として公案工夫していたであろうこと、ふたつには、「家伝書」では前の偈文の前二句のみを引用し、しかも「家伝書」での論述文言は『新陰流兵書』に記されている文言とも異なっていること、等の理由から、時間的には「第一伝書」の後に書かれた宗矩の思想ではあるが、今これを掲げて、彼の心法論の根本にあったものを窺い知ろうと思う。以下にその要旨を現代語訳して示すこととする。

兵法は一大事の所作である。その故は、（人の修する）道は様々多いが、花鳥風月に心を暢べ、詩歌管絃に気を慰める類ならば、身を失い命を落とすこともないからである。兵法は、木刀で稽古しても誠の時、剣刃の上の勝負事である。木刀でその全部を稽古習熟しても、真劍勝負の場では、十の内の五つにもなり難い。然しながら「習」の太刀数に十分に習熟し、深夜の寢床で突然起き上って、覚めている人と

立相つてわが太刀（ここでは木刀か）を遣つても、打たれることがないように自由自在を体得していれば、極意とするところの心は自然に身に備わるものである。

手足が自由に働かず、稽古も足らずして、極意秘曲を聞くだけで上達が成るのではない。「習」をよく積んだ人でなければ初めから極意を相伝するということはない。いずれの道においても、このことは違うものではない。取り分け兵法は、負ければ命を落とす事であるから、世の常のことと心得べきでない。「無刀」などということも一大事の子細で、「取つてみよ、見ているから」などと、人の所望で取つて見せる事ではない。了簡思案が尽きた時、わが一命を延べるために用いる極意である。この一大事を人に取つてみせたならば、誠の一大事にわが用には立つまじき事である。「無刀」の「習」といへども、稽古不足はあつてはならぬ。

そもそも、この一心の正しい人でなければ兵法というものは成り立たない。然る故に、稽古の初めより極意に至るまで、一心を取り固めて乱さず、さらに至極の位に至つては、この一心を追つ放して自由自在に働くのである。一心を明らかに悟得しなければ、到底成就し難いのが兵法の道である。師伝として、

「心ハ万鏡ニ随ヒテ転ズ。転ズル処実ニ能ク幽ナリ。」

とあるが、この二句は兵法の眼（目）である。万鏡とはわれに向かい合う様々（の対象）をいう。花・月・雪・山・かね（鉦？）・海・川、或いは人・友・何でもわれに向かい来るすべてを万鏡という。わが心は、その向かい来る物ごとに転ずるのである。兵法では、敵が上（段）に構え、下（段）に構え、車にめぐらせ、懸に進み、待に控え、様々に働くのを万鏡と心得よ。その万鏡に随つて転ずるとは、一所に心を留めず、敵の働きを見て、その見ている心をさらに転じて、敵の変わる手だてを見、またその見るところにも心を留めずして替えるという働きをするのである。これが「心、万鏡ニ随ヒテ転ズ」である。

「転ズル処実ニ能ク幽」とは、幽はかすかと訓める。見え難いの意。敵の働きをきつと、一目見てそこに心を留めず、また心を転じて、しかもその転じた処に少しも心が残らない、これを幽という。人の心は目に見えず形もないから、人の出す所作にのみ心は現れ、それによつて胸の内なる心を外から知ることができるとは、したがつて、心は転ずるところに現れ、転じた跡はもはや幽にして見え難い。心は、先へ先へと転じて、跡に残らない、そこが肝要と心得よ。「一所に心が留まれば、（心の）用は十全でなく欠ける。よく幽なる心こそ篤と明らかにし、

心が転じて少しも跡に残らぬよう、わが一心を自在に働かすことが肝要である。

「流二随ヒテ性ヲ認得ス」とは、わが心が転じて少しも跡に残らぬところを「性」という。水の流れて先へ転ずる如く、心が先へと転じて跡を残さない、そのような心の（本来の）働きを体認することを「性ヲ認得ス」という。流れるが如く自在に転じて、一処に留らない、それが心の本性であるから、それを兵法の心として取り込むべきである。「喜モ無ク憂モ無シ」とは、喜ぶも心、憂うるも心であるから、その心が転ずれば、喜も憂もない。転じて働いている心の本性だけがある。

この四句は、ともに兵法の心の在り方について、一所に心を留めない、常に転じて跡を残さない、ということをお教えたものと取るべきである。初心から極意に至るまで、この心持を忘れてはならぬ。わが心が右に留まれば、敵に左を切られ、左に留まれば右を切られ、上に留まれば下を払われる。心の置き所（位）を定め、自由に転ずる心を一度々々にそこへ帰しそこから十方へ心を転じて配るべきである。この心の置き所を「西江水」あるいは「神妙剣」と秘伝するのである。

以上、長きを厭わず『新陰流兵法』の要点を抽出した。奥書には「此ノ一卷ノ書物、私ト沢庵和尚ト相對シテ是ヲ作ルト雖モ、当流ノ極意ヲ知ラント欲スレバ、心理ヲ知ルベシ。心ノ理ハ則チ極意ナリ。……」（原漢文）とあって、この書は沢庵和尚との合作であるが、しかし新陰流の極意を知るに心理を知らねばならぬ、心理こそが極意なのだから、と強調している。この書の初めの部分に、「習」は極意ではないが、「習」に熟達すれば、極意とするところも自然に身に具わってくる、とあったが、そこにたゆまぬ稽古を積み重ねることによって、「習」に習熟・熟達し、さらにそれを超え離れて極意に至り、それをも超脱した「向上」の世界への悟入が示されているものと理解できる。その「向上」の世界を、この書では「武蔵野」といい、そこへ「つんで四方一目に見渡せば」、心に何物もうつってすべては方寸の胸の内にある、その位こそ、「至極に至れる得心の人の事」であると述べている。これはしかし、当然のことながら初心者の稽古不足が思ったところで、所詮は本を捨てて末を詰める如きもの、上手上達は成り難いとされる。

さてところで、前項で整理考察した「第一伝書」の心法論の要訣は何であろうか。五十二箇条を整理した項目ごとにその要点を挙げてみよう。(1)兵法の「習」の基本を心得る事では、新陰流には太刀の構えがなく、立相の三つの要点を心得ていけばよいとしていた。即ち無構えによって敵にわが意図を知られないよう、他意なきようにすることが当流の構えだとする。いわゆる無構えの構えである。(2)立相の心構え（心の置きど

ころ)では、太刀の構えを習うと、それだけをよしと、それで勝てるとおもう。それは敵の心気、手足の動き、働きに随わず、自分の心だけで打つて出ること、当流の「ひが事」としている。兵法の字義は「よけはずし」が第一義で、無構えで心の底だけを張りつめ、敵の動きに乗る心構えが大切であるとする。(3)兵法習熟の心構えでは、目付には種字種利剣、太刀合いには水月、太刀のおさまりに神妙剣を三要件とする。前項で詳しく考察したように、敵の心の動き、身の動き、太刀の動きの兆(きざし)ないし端緒はすべて手の内にあつて、そこから現れるから、この目付で相手の手の内を通して心(未然・無)まで察知せよということ。水月は間合であるが、単純な彼我の間の距離をいうのでなく、水月の位におれば、いか様に敵が切り掛かってきても当たらぬ間合で、相手の大小によつても異なるから、そのつもりが大切という。これは後にさらに深い意味をもち、神妙剣とかわる。さらに太刀を持ったとき、その太刀はどこへおさまるかということ。そのおさまるところを神妙剣という。「おさまり」とは、太刀を持ったときの心の置き所をいう。心の働きは気であり、その神気が体中にゆきわたり、しかもその原点が臍の周り五〜六寸に集まっているとき、目付も水月もここに帰着し、ここから始まる心身手足の働きの源泉となるのである。そればかりか、太刀の動き・技すらの出発点となる。それ故に、この三者は「習」において習熟すべき極致を意味する。いずれも物理的なものを含みながら、しかも徹底して心の在り方、心の置き所を問題にしている。

次の(4)病気を去る事については、最も説明を要し、理解の困難な内容が一条の中にこめられていた。先に宗矩が『新陰流兵書』において、兵法は負ければ命を落とす一大事なることを強調していた。截合はまさに生死の竿頭に立つことであるから、立相の相手の顔や太刀を見て臆するは、理の当然である。あらゆる怯憶の心を病氣と規定し、一心になってそれらの病気を捨て去ることが手利剣ひとつの目付になるということであつた。しかし、その一念一心も既にそれに着すれば病氣であるから、遂に「無心」に至れという。「一念を去る心」すら忘れることがこの道の至々極々であつた。しかしこれは、立相におけるわが方の心の在り方である。既に立相つて生死の際に在るわれは、いかにして相手を知るか。そこに「空の調子」「捧心」が求められる。前者は、相手の動きや技を志向する構えもなく、心気の動き働きも感得されず、総じて相手に何の兆もない、その「無」のところをわが心にしかと受けとめ、敵のその「無」に対して仕掛けて行くを「空の調子」といった。その意味では、後者の「捧心」も、心の発するところを見る心であるから、同じことをいっているようであるが、しかしここでは太刀技や身手足の動く以前のところ、つまり心が動き発するところをわが心眼をもつて観破することが求められる。興味深いことに、立相の心法としては、一に去る「手利剣

の目付」よりは「空の調子」が早く、それよりはまた「捧心」が早いとされ、浅い目付から順次深い目付に及び、最も早い「捧心」の目付を専一とするが、もしこれに仕損じては「空の調子」に間に合うか、さらに遅れて「一去||手利剣」の目付に間に合うであろうとしている点である。

次に(5)の懸待の心構えでは、截相生死を分ける際には、いかに相手を攻めるか、わが身を守るか、攻防についてあれこれと心の動くことを戒めていた。懸(かかり攻める)と待(守りひかえる)の兼ね合いでは、「第一伝書」第一四条では、「二通りだというが、心法論上から細かく分ければ、㊶急に懸って打つ ㊷足と身を懸りにして打たぬ ㊸心と身を待の位において打ちかける ㊹待の位で打たぬ——の四通りになる。

端的にいえば、懸―懸待―待懸―待が、立相攻防の心構えであるから、この方式を立相の状況の中で分別判断せよ、これ以外に迷うなということである。この懸待の心理的判断は、次の(6)の水月と懸待の關係の心得では、「水月」という、敵との物理的・心理的間合の關係に絡んで、心法はさらに複雑精密を極める。第一五条から第二八条にわたって詳細に述べられていることは、截相の最も具体的な掛引きにもかかわるからである。このような掛引き、手だては、(7)の「表裏むかひ」の仕方、さらに具体性を増した心法論を展開する。「表裏」も「むかひ||迎」も、かけひき、仕掛に類することであるが、重要なことは、心理的には「先」ないし「先の先」に関する「道理」と表裏の「習」とが共に会得されなければならない点である。前述の「懸」と「待」、さらにそれと「水月」との關係の上に、さらに「表裏」ないし「迎」が加えられて、截相の場における心の持ち方・在り方は具体的な「習」として働くことが求められ、新たに「二目遣」や「色につき、色に随ふ」とを提示する。截相の攻防は、それが始まり、そこに身を置く以上、截られないで打ち勝つことが要件であることというを俟たない。その極意はいささかもわれを先に立てず、よく敵にまかせた位になること、立相では先の位で仕掛け、表われる敵の色に随って勝つこと、それは敵に打たれ、打たれて勝つということ、それはまた敵がわれに仕掛けられて心気を動かし、まさにその心気の動き移らんとするところであり、そのためには、「水月」(の間合)に入る前、掛り合わぬ前から敵に対して心を付けておくこと、等々が求められた。以上彼我心理の分析・対応は詳細を極めていた。

そして(8)の相手の違いによって勝つ心得では、十人の敵に別々に勝つことはあり得るが、一人の相手に十度勝つことは稀であると教え、いかに立相の心法では、相手の心理・身手足の動き働きが、われとの關係において把握されねばならないかを説く。そこで新たに、力が強く懸の位にある者に対しては、急に仕掛けてくる者と同じく、「遠近の位」を取ることを教え、さらに、強き者にはわれも強く仕掛けて敵に強みを増させ、

終に油断も生じて自分からゆるむところを見て勝てと、強い先の先を求める。

以上の如く懸待攻防の心法を詳細に説き来つて、帰するところは(9)の「兵法は、一心の働きに極まる事」に至る。兵法の截相は、仕掛・手だてに極まり、人の気心の兆す所に随つて勝つこと、兵法はわれが使うのではなく、敵に使わせて勝つ、ということが至極の道理であり、その一心の働きが無念夢想の境位に到達したとき、敵の動きのすべては見える。「愚智に返る心持」とはこの心法であった。そして(10)の外の物を遣う心構えも、右の太刀を取つて立相う心法と全く同様であった。とくに具体的には「せんだんの位」が求められ、相位は相突き(鏖)の太刀筋になることを戒めている。

「第一伝書」は、宗矩の父宗嚴が金春七郎氏勝に「目録」として与えた最後の秘伝である、「無刀」の「習」の心得を説いて終る。この項の初めに宗矩の『新陰流兵法』を取り挙げ、「無刀」の心法を述べておいた。「第一伝書」末尾の第五二条で説く「無刀」の心法の根本精神は、無理に人の刀を取るのではなく、様々な状況の中で立相(截相)の場に立たざるを得なくなつたとき、相手に対してどう対処するかを分別しなければならぬ、いわばゼロの出発点のところの心の在り方が前提とされる。截る・取ることが目的でなく、いかにしてわが命を延べるか(前掲「兵書」が「無刀」の目的であり、極意であった。故に、相手が仕掛け打ち掛つて来ず、また自分の太刀を取られまいとしている敵があれば、もはやわれの勝ちとされた。しかし、截り掛らんとする敵に対しては、「神妙剣」の位、「観の目付」(捧心)によって気前(機前)の兆を観破し、先先の位で相手に仕掛けて、その心気身手足の働き出るところを勝て(取れ)と教えた。そして最後に、「習」をもとにして常に心を新たに、気を働かせ遣う兵法者を上手上達の人とし、「習」に熟達する稽古によって、遂にはその「習」をも離れることが兵法修業上の至極の要諦とされた。

結語にかえて

本研究は、標題の如く柳生新陰流兵法伝書における心法と技法に関する思想の体系的考察をその目的としていた。その最初の試みが本論文で述べた「第一伝書」の解説考察とそこにみられる心法論の要訣であった。「目録」から「伝書」形成への移行過程において特徴的なのは、流祖上泉伊勢守秀綱が、永祿八年(一五六五)から同九年にかけて、壮年の柳生新左衛門尉(のちの宗嚴)に与えた「印可状」及び「新陰流」目録

第一において、この流派の心法重視の姿勢が明確に示されていた点である。禪の古語を用いて心法をも説き、全体としてそれを「円転」と称していた秀綱の、流派形成にかかる精神的立場は、それを直伝された柳生宗厳によってさらに強調され明確に打出されていた。既に述べたように、宗厳は金春七郎氏勝に与えた最も整った「目録」に、同じく古禪の偈文を挿入することによって、新陰流における心法理論の根柢とした。

しかし、宗厳までは「目録」による相伝が主で、新陰流の奥儀は専ら口伝により、わずかに「進履橋」のみが「目録」と「伝書」の中間的な体裁をとっていた。いわゆる「伝書」は、その子宗矩によって記述されたもので、それは流祖以来の口伝、とくに父宗厳の教え伝えたものを記録し、且つ自らもそれに基づき、日々の稽古鍛錬によって工夫考案したものの文章的表现として、逐次形成されていった。「第一伝書」は、その最初のまゝとめとみることが出来る。恐らく宗厳の教えの内容は個々不順で、時と場に応じて宗矩に伝え説明されたものであつたろう。それを五十二箇条に記述してまとめた宗矩の力量と努力はかなり高度のものであつたと推測される。しかし、完成した「家伝書」からみれば、その記述の体系性は未だ成っていないが、「第一伝書」には、具体的な、殆ど技法に近い「習」の最少必須要件から書き始め、「太刀かまへ」の在り方ないし心構え、「懸待」及び「水月」の理法、「表裏むかひの仕やう」、「しかけ手たて」、「外の物」、「無刀」、そして総括へと展開され、その間に「種字種利剣」「神妙剣」「捧心」「目付」「心の下作」「せんたん」「無念無想」等々の心法上の重要な概念が織り込まれていた。

注意すべきことは、將軍家光の要請がここにある「兵法心持」であつたからとも考えられるにせよ、「第一伝書」には全く太刀技(刀法ないし勢法)を欠いている点である。このことは何を意味するであろうか。まず第一に考えられることは、本稿でも述べたように、「兵法は一心の働きに極まる」という主意が流祖以来一貫しているとみられること。第二に、したがって、いかに太刀技に優れていても、心に執するところがあれば、「習」としての太刀技も十分に自由自在に使えず、結果として打たれ負ける故に、「構えなきこと」「無念無想」を強調したものと考えられること。第三に、太刀技は、いわば「勢法」ないし現代の「形」に類するもので、ただ無闇に太刀を振り廻しても勝てるわけではない、太刀遣いに筋道(技法)がなければ截ることはできないから、その意味で刀法としての技は「習」の習熟において求められていたが、問題は最終的にはそれを遣う人間主体、とくにその心の持ち方・在り方・心構えにあるを強調していること。第四に、太刀を遣う截相(立相)の場における「心持」、つまり心法は、その根柢には深い哲理ないし道理性を秘めつつ、具体的には、技、太刀及びそれを操るわが身手足、心気の働き方、働かせ方と不離一体のものであること、それが「兵法わかつかうにあらず。てきにつかわせてかつ事肝要也。しかけ手たてハ、わか身のならないなり。

かつところへてきにあり。」という第四一条の表現となるのであって、勝つところはわれに在るにあらず、相手の側にあるのだという理性は、柳生の新陰流の真髓を闡明したものと考えられること。第五に、この真髓としての道理・精神が、「種字種利剣」「神妙剣」「捧心」「水月」等々の用語に示され含み込まれて、立相の具体的な心構え、太刀遣いの心法となり、さらに心一般の在り方、持ち方に連っていること。そして第六に、右に述べたごとき心法と相伝の技法との総合的統一の境位に、「無刀の位」がおかれたものと考えられること。かくして、太刀技（技法）の「習」と、心の「習」（心ないし心気の鍛錬も強調されていた）とが総合的・統一的に止揚されて、当流の極意・至極としての「無刀の位」が成就するものなることが強調されたと考えられる。

右のような「第一伝書」の心法論は、「第二伝書」（『新陰流兵法心持』）に至って、一層詳細精密になるが、その思想的体系性という点では、完成された「家伝書」に及ばない。これについては、別の機会に、「第二伝書」及び「家伝書」の考察を通して明らかにしたものを述べたい。また本論文の冒頭に掲げた山岡鉄舟の強調する、日本人に固有の「一種微妙の道念」なるものが、例えば柳生新陰流の伝書ではどのように読み取れるかという課題についても、別の機会に述べる予定である。（未完）

注

- (1) 山岡鉄舟「武士道」『剣禅話』所収、九一頁。高野澄編、徳間書店刊。
- (2) 例えば山本真功「武士道論争」を参照。今井・小澤編『日本思想論争史』（ベリかん社刊）所収、二三四頁以下。
- (3) このことについては、前掲『剣禅話』、『海舟座談』（巖本善治編・勝部真長校注、岩波文庫本）、『武士道』（山岡鉄舟口述、勝海舟評論、勝部真長編）等を参照されたい。
- (4) 前掲「武士道」四九頁。
- (5) 前掲『剣禅話』三五頁。この一文は同書中の「剣法と禅理」について述べた末尾にみえる。鉄舟は九歳の頃から剣法を学び、「刻苦精思すること凡そ二十年、然れども未だ嘗て安心の地に至るを得ず。是に於いてか鋭意進取して剣道明眼の人を四方に索め」ていたとき、たまたま一刀流の達人浅利又七郎義明に会い、試合を請う。「果して世上流行する所の剣術と大に其趣きを異にするものあり。外柔にして内剛なり。精神を呼吸に凝し、勝機を未撃に知る。真に明眼の達人と云ふ可し。」と述べているように、浅利は到底鉄舟のかなうところではなかった。以後「昼は諸人と試合をなし、夜は独り坐して其呼吸を精考す。眼を閉ちて専念呼吸を凝らし、想ひ浅利に対するの念に至れば、彼れ忽ち余が剣の前に現はれ、恰も山に対するが如くであった。そこで鉄舟は、京都の嵯峨天龍寺の滴水和尚に参じて禅理を聞く。「兩刃交鋒不須避、好手還同火裏蓮、宛然自有衝天氣」の公案を授けられたが、もとより直解することはできない。三年も経る頃、相場を扱う豪商から聞いた相場の呼吸から、先の公案の意も悟り（明治十三年三月二十五日と記す）、これを剣法に試み、「夜は復た沈思精考

する事約五日、同月二十九日の夜、従前の如く専念呼吸を凝らし、釈然として天地物なきの心境に坐せるの感あるを覚ゆ。」と。時すでに夜は明けた。鉄舟は坐ったまま、「浅利に対し剣を振りて試合をなすの形をなせり。然るに従前と異なり、剣前更に浅利の幻身を見ず。」と。そこで再び浅利を招いて角技を請う。「一声忽ち電光石火の勢なり。浅利、突然刀を抛ち、兜を脱し容を正して曰く、子既に達せり矣。到底前日の比にあらざるなり。余亦及ぶ所にあらず。」と。いって、一刀流無想剣の極意を免許した。この時に感得悟達した心境が次の詩に托されている。

学劍勞心数十年 剣を学び心を勞すること数十年
 臨機応変守愈堅 機に臨み変に應じ守愈堅し
 一朝覺壁皆摧破 一朝にして覺壁皆摧破す
 露影湛如還覺全 露影湛如として還全きを覺ゆ

論心総是惑心中 心を論ずれば総て是れ心中に惑い

擬帶輪贏還失工 輸贏に擬帶すれば還工を失う

要識劍家精妙處 劍家精妙の處を識るを要むれば

電光影裏斬春風 電光影裏春風を斬る

(6) 前掲「劍禪話」「修養論」九一頁。

(7) 筆者はこの節で「兵法論・武芸論」という語を用いたが、西山松之助氏もいわれるように、戦闘を前提とし、敵を倒すことによつて勝利を制するための武技は、刀剣・槍・小太刀・手利剣・棒等を含んでおり、十七世紀に入る前には、弓と馬と砲術とが「武芸」となっていただけで、「兵法」は十七世紀までは、芸道思想の特質と展開、日本思想体系、『近世芸道論』所収、岩波書店刊）また、本稿にかかる研究では、近世日本文化史とくに芸道・芸能史の研究の西山松之助氏、武道史・武道論関係の研究の今村嘉雄氏、渡辺一郎氏、歌舞伎等芸能史研究の郡司正勝氏等の数多くの優れた業績に教示されるところが大である。

(8) 『柳生新陰流兵法家伝書』の形式過程等については、渡辺一郎氏「兵法伝書形成についての一試論」（前掲『近世芸道論』所収、六四五頁以下）に詳しく論ぜられているので、同論文及び『史料柳生新陰流』上・下巻、今村嘉雄編の「総説」の部分参照し、本稿では主として柳生新陰流兵法伝書の心法論に関する解説と、思想的検討を中心に進める。

(9) 本稿で取扱う資料のうち、テキストについては、今村嘉雄編『史料柳生新陰流』上下二冊本（人物往来社刊）と、渡辺一郎校注『兵法家伝書』（日本思想体系61『近世芸道論』所収、岩波書店刊）を主として用いる。『兵法家伝書』については両氏ものは、字句のうえで若干相異があるが、思想解釈に影響を与えない限り、適宜取捨選択して使用する。

(10) この「目録」は、前掲今村編『史料柳生新陰流』及びその他の武道関係資料集には集録されていない。渡辺一郎氏の前掲論文に記載されているこの「目録」は、未公刊の柳生家文書的一篇と思われる。そして、題名が「目録」と記されているところから、以下の②③と異なつて、殆ど詳しい説明はないものと思われる。ただし、これに類するものは、慶長元年丙申十一月十二日付の『新陰流兵法目録』に、「三学円太刀」が含まれており、同じものが慶長九年八月吉日付

で遺されている。前者は、宗嚴の署名、後者は宗嚴と徳齋（四男）の連署である。いずれも刀術の名称が記されているだけである。今村編前掲書上巻一八二頁及び二一八頁。

(11) 今村編前掲書上巻、二五七頁―二六五頁。（以下では、『史料』上巻ないし下巻と記す。）

(12) 『史料』・下巻、九八頁。この説話は極めて有名で、中国明代の学者、李呈芬の著『射経』の「眼法」第八にも採り上げられている。即ち、「昔、飛術教紀昌射、以斃懸虱、著羅望之、三年若輪、貫虱心、而懸不絶、蓋視小如大、学不瞬、而後能、此射家第一義也、」（濱口富士雄『射経』一四二頁参照）『史料』下巻「月之抄」五九頁

(13) 史料・下巻「月之抄」六五頁。なおこの引用文中「初心ノ兵法も乗ル心アルハよしト云々」とあるが、「乗ル心」とは如何なることかについて、「月之抄」には、「父云、初心ノ心ヲ持テ、他ニ心ナキ所ヲ乗ルと云也。サキノ心ヲ、うけトツタル心、乗リタル所ナリ。向ふと位一つに成ル所、乗ル心持也。初拍子、有拍子、無拍子、心ニアル拍子也。無拍子ヨリ出ル也。出ル所ヲうけてハ、いつれも乗ルへし。拍子ハ心也。イキアイ也。所作ハ数也。アタル所ハ、ほと、云所ナリ。」と説明している。（同書六〇頁）これをみても解る通り、初心の兵法における「乗ル心持」も、極めて高度な心法と技法の統合において可能なものである。「一刀流」の極意中の極意である「切落し」も、この心持が中心である。これからしても「習」の熟成度の深さを伺うことができよう。

(14) この部分の本文は「うへをゆふにもちゐてよし」となっている。「うへ」「ゆふ」は語としては難解であり、したがって、文意を捉えておいた。「うへ」は「上」でおもて、うわべの意味。ここでは外に現れた身体全体の指すであろう。「ゆふ」は「融」で、とどこおりなく、柔かなことを意味しているのではなからうか。

(15) 本文の「てきのはたらきにのらんためなり」の「のる」は、注(13)を参照。

(16) 『拙聞集』、『史料』・下巻八七頁

(17) なお右の「種字種利剣」の次には、「真の位の事」という項があつて、そこではさらに詳しく敵の種字種利剣との関係の中でいかにあるべきかが説かれている。これはのちに紹介する。

(18) 『拙聞集』、『史料』・下巻八七頁

(19) 『月之抄』、『史料』・下巻三〇頁

(20) 同右三三頁―三四頁

(21) 『拙聞集』、『史料』・下巻八九頁

(22) 『月之抄』、『史料』・下巻三七頁以下

(23) 『拙聞集』には、「二去る心持の事」について、「人の身の内にて取りわけおそる、所を吟味する時は、眼なり。敵のかゝるを見てハしりぞき、太刀の上ルを見てハおそる、は皆眼のわざ也。然故に、此取わけおそるしまなことをさきにつきたて、仕かくれば、少も病気は出ぬもの也。是を一ツに去ると云。」とある。（『史料』・下巻八三頁）これは父宗矩の遺したものでなく、三嚴の所説で、敵のまなことを突き立てるようにならぬように攻めて相手に仕掛けることにより病気を去ることができるといふ。

(24) 『拙聞集』、『史料』・下巻九三頁

『月之抄』では「空之拍子之事」と見える。基本的には同じことを意味すると考えられるが、宗矩の遺したこの説はより具体的で、しかも將軍秀忠に稽古をつけた頃の目録にあるものと三藏は述べている。以下の通り。「父云、中段以下ノ太刀アガラサレハ切事ナシ。サルニヨリ、アガル所へ拍子ヲ用ル也。上段ノ太刀いつれも身おはなれたる構、あぐる事ナラザレハ、ヲロス一ツ也。ヲロス所ハミヘニクキモノ也。是に付ミヘヌサキ、アラハレザルサキヲ心ニ付ル事專一ナリ。心ニ宜也。空ハミヘヌ所ナリ。工夫心持專也。亡夫ノ録ニ別儀なし。

亦云、空ト云ニ二ツアリ、虚空ト心空ノ差別は、本空、凡空トモ云、ムシナル所ニ心ヲ付る也。至極ナリ。心ハカタチモナク、色モナシ。カモノシ。ミヘヌ所ヲたとへし空也。目付仕掛、諸事万事動き、ハタラク出ザルマエ、無キ所ニ心ヲ付ヨ、心ヲサシテ空トシレ、無事ナル所ヲ空ト知レ、アラハレタル所ハ空ノスヘナリ。

父云、空ノ習ハ敵の動初ル心持ヲ見シル習ナリ。迎ヲ仕懸、敵思ひ付所ヲ空ト云、手利劍ノヲコロノ初メナリ。又、セイガンノ構ニ付ト云心持は、又アガル所ヲ勝ヲ空ノ拍子ト云、捧心よりハヤソシ。一二去ルヨリハはやし、など、書ルアリ。いつれも是ハ、秀忠公御稽古ノ時分ノ目録ニアリ。

ここで注目すべきは、次の事項である。①中・下段の構えの太刀のあがるところへ拍子を用いること、②上段の太刀を振りおろす前のは見えぬから、これを空という。その振り下す太刀の動きの現れる先に心をつけること、③目付、仕懸、諸事万事が動いて、働きの出ない前、「無」のところを心をつけよ。④心が空である、無事なるところが空である、現れたところは空の末と知れ。⑤「空の習」、つまり「空」について習熟するには、敵の動きが始まるその心の動きを見ることが肝要である。⑥相手の「無」に先先の心持で仕懸け、敵が（何かの動きをしようと思いつくところが空である。手利劍（手の内）の起こりの始めである。⑦「晴眼（正眼）の構えにつける」という心の持ち様は、敵の太刀のあがるところを勝つという心持で、これを「空の拍子」という。この心持は「捧心」よりは遅く、「一に去る」よりは速い。（『史料』・下巻三八―三九頁）

(25) 「捧心」については「月之抄」には、「捧心之仕掛と云心持之事」において、三藏の極めて注目すべき私見を次のように述べている。即ち、「私ニ云ク、是のならば、敵ト一体ニ成ル心持也。家光公被_レ仰聞也。ナキ所ニ心ヲ付テ仕掛、敵の心のヲコル気サシエ、我ヲコル心ヲ可_レ為_レ乗也。敵ト我ト一体ニ成心ゆへ、打ヤミテ則勝ト成心持也。至極向上成儀也。」と。心をもって心を観る―という窮極の「観の目付」の心理は、三藏によれば、「敵と一体になる心持」であった。さらにそれは具体的に、敵の「無」に未動のところをわが心をつけて相手に仕かけ、敵の心の起る兆へ、わが起る心に乗せようとするのだという。「乗る」「乗せる」という心持は、注(13)にもあるように、「向ふと位一つに成ル所、乗ル心持也。」で、相手と位（心の定まった状態）、「月之抄」四七頁）がひとつになること。つまり敵の心のまさに起こらんとするところへ、我が心を合わせ乗せて一つになることだから、三藏は「捧心」とは敵と一体となる心持だということである。

(26) 「とまる」「とまらせる」については、「月之抄」（『史料』・下巻四七頁）の「留ルト云心持之事」で、「父云、心ノ一方ヘカタヨリテ留ル事ヲキラウナリ。着スル心ナリ。アユミ、所作、心持、いつれモ、へん（偏一）ならざる心持專也。行ク内にも、とまると思ハバ、取かへあたらしく、シナヲ（仕直）シタル心持ヲ習トスル也。…」と記している。

(27) 「位」ということも非常に難しい心の状態をいっただけである。十兵衛三藏は「月之抄」において「位ヲ定ルト云心持之事」の項で次のように父宗矩の説を伝えている。

「父云、センヲ取りタル心ノ定マリタル所ヲ位定ト云、たとへハ水月ヲ立懸タル所勝也。是からハ、敵ヲくつろげも、ひらかせも、はつさせもせぬをと、思

ふ心ハ位定ルへし。敵ヲウカマウ心ノ内ヲ位ト云、ウカマウ心ノヤミタル所、定リタル心持也。亡夫ノ録ニ別儀なし。」

これをわかり易く説明しよう。立相の敵に対して、「先を取る」とよくいわれるが、そこには己れの心持がなければならぬ。それが「先の心」で、それを相手に対して持ち続けるとき、「先の位が定まる」というのである。例えば、「水月」の間合を取り、そこから「先の位」で行って勝つのだが、その「水月」の間合に立って、そこからは、敵にゆとりも与えない、体を開かせもしない、切り掛けたときわが太刀を外させもしない——と、先（攻め）の心を持ち続ける、それを「位が定まる」というのである。「位」とは、敵の心気・体の動静のすべてをうかがう、心の内をいい、そのわが「心の内」の働きが、そのままとぎれることなく続いている状態を「位が定まる」「定つた位」という。

したがって、ここにいう「敵にまかせた位」とは、相手の心の動きにまかせ随いながら、しかも「先の心」を取り続けている、そういう心の状態をいうのであって、「まかせ」だからといって、当方が受身になり、心が「後の位」になったり、乱れうろたえたりすることではない。

(28) 『月之抄』では「打うたれ、うたれて勝習之事」の項で次のようにいう。「父云、是ハ、まつ／＼切らん、打タント思ふ心ニより、仕而敵ニ切ラル、ナリ。敵ニ能ク切ラレ、打れんと思へハ、敵切ルニヨリ、センヲ待テ勝心也。切ラル、所ノ勝也。打ントスレハ所作サキニタツニヨリ、センヲ敵にトラレきらる、也。打チ分ルゆへナリ。うてバうたる、ウタルレバ勝ト可心得也。諸事ニ面白キ心也。……」(『史料』・下巻四四―四五頁)

(29) 『玉成集』の「遠近の習之事」には「是ハ敵急につよくかゝるもの、こまかにきりかゝりにかゝる者によし。さ様のもの遠近とうつ也。すみをかかると云心持肝要也。口伝有レ之。」とある。(『史料』・上巻三四五頁)

『月之抄』の「遠近の事」には、次のように記されている。(『史料』・下巻二三頁)

父云、敵懸に懸り、こまかにテウ／＼と打掛るものに、すみお懸け、ひとあしとひのきたるよし。とひのきて近く成理アリ。然ルより遠近ト云。

亡夫ノ録ニ遠近の位拍子、付り、大拍子ノ小拍子、小拍子唱歌の事ト書セル。亦云、遠近之拍子位ヲ知ル事大事、付り、拍子合時ハ遠ク、拍子合テ近シトモ書。亦云、楽に位詰テはたらかぬ時、又急に仕懸クルモノニ遠近の文字分別也ト書。亦云、位ヲあまし、近ク成心持、遠近ト知ヘシトモ書ル。亦云、所作ヲ遠ク、遠キハ心近シ。半分の身速クシテ半分の身近カシ。一左足角ヲ掛テ飛のくへし。是遠近ニ用ヲ取、左足積リナリ。つまりたる処之心持ナリトモ書セルナリ。

『玉成集』で宗矩のいうことは、①急に強く懸ってくる敵、細かく切り掛りに懸ってくる敵に、この「遠近の習」はよい。②かかる相手には、遠近（とおくちかく）と打つこと。その際隅をかけるという心持が肝要であるとしているが、肝腎の「遠近」ということ、「すみをかかるといふことが如何なることか。これについて『月之抄』の記録の要点は以下の通り。

①懸の位で攻めに攻めてくる敵、細かに丁々と続けて打掛ってくる敵に、隅を懸け、一足飛び退くがよい。飛び退いて（かえって）近くなる理がある。

②亡夫、宗殿の記録には「遠近の位拍子」とあり、付けたりに、大拍子には小拍子で、小拍子には唱歌（ここでは大拍子のこと。『月之抄』・『史料』・下巻二二頁）の事とある。

③また、「遠近の拍子では位を知ることが大事」とあり、付けたりに、拍子が合う時は遠く、拍子が合って近くなる、とも書いてある。

④また、楽に位を詰めて（相手の所作が）働かぬ時、または急に懸ってくる者に対して、「遠近」ということを分別せよとある。

⑤また、「位をあまし」、つまり相手と水月の位で立相っている時、その水月の間合（一足一刀）に立つ位を余して遠くし、しかもそれがわれにとって近くなるように考えてそうするのが、遠近ということだ。

⑥また、所作（はたらき）は遠く取っておき、心は近く取る。換言すれば、半分の身は遠くし、半分の身は近くする。「一左足角を掛けて」、つまり左足（構えの後の足）のすみ爪先の方を立てかけて、（一足）飛び退くべし。これが遠近の用を取った時の、左足の意図である。これが、敵とわれとの間の心・気・手足・身のさし迫った時の心得であるという。

以上に解析したところを要約すると、「遠近の位」とは、彼我の心・気・体の間合が詰まったとき（敵がひたすら、しかも急にかかる時であるから）、敵からは遠く、われからは近い間合の位取りをすることで、そのために、われが一步ないし半歩うしろへ飛び退きながら、しかも左足のスミ、つまり爪先を床ないし地面に掛け立てる。そうすることによって、形の上での彼我立相の間合は、彼からは遠くなるが、われの左足はうしろに引きつつも、足先に力が入っているから、直ちに切り掛けることができる。よって、実質的には、われからの間合は近いということになる。

(30) この第一伝書『兵法截相心持の事』の第三八条の後半は「待にして、つよきもの、しかけいかにもつよみせてうちかけ、敵に強みますやうに急に仕懸候得は、後までつよみおへぬ物にて、油断も出来、我とたをる、物にて候。其所を見て勝心持気随ふ事第一なり。」とある。

『玉成集』所載（『史料』・上巻三五八頁以下）、鍋嶋紀伊守より同内匠に与えた（元禄八年正月二日付、一六九五）『兵法截相心得之事』の該当箇所には、「待にしてつよきもの、仕掛、いかにもつよみせてうちかけ、敵つよみますやうに急にはたらきかけ候様に、後までつよみならぬ物に候。油断も出来、我とたをる、事ある物にて、其所を見てかつへし。敵のつよみにしたかふ事肝要也。まけて勝心持、氣にしたかふ事第一也。懸隔にちからちかひ候とて、あひすんにては多ちかハぬ物なり。」とある。前者と後者とは、表現が若干異なり、しかも後者には、次の条文（第三九条）が字句を若干異にして末尾に付けられている。前者は元和九年二月（一六三三）の成立、後者は七十二年も後のもの。『史料』・上巻には、『玉成集』第三の右文書は、それ以外の正保二年五月（一六四五、宗矩死の前年）の同文書が紙質風化し採集不能のため、これを載せたのである。したがって、右の前後両史料は単純に比較できない。伝授の過程で書き変えられたものであろう。解釈上の参考にはなる。

なお、右の引用の末尾「懸隔にちからちかひ候とて、あひすんにては多ちかハぬ物なり。」は、第一伝書第三九条では「紅白にかたちちかひ候とも、相寸にてハお、くちかわぬもの也。」とあり、これだけで一条をなしている。他の資料にはこの条はない。

(31) 『拙問集』（『史料』・下巻八四頁〜八五頁）には、「せんたん打こみの事」を「二葉と申心持にて候。打こみの太刀筋ならぶと申事を嫌申候。遠近の心持にて下太刀筋太刀先を上打こみ申候。いろこかたと申鑓の習と同時に候。鑓のつきこみも、せんたん二葉とつき候へハ相つき無物にて候。第一せんたんハ相打をさせまじき為にて候。心持にて申候時は、何も神妙剣をそむけて取こむ道理にはつれ候事はなく候へとも、是諸作の習なれハ、色々に数多致す事にて候。至りては数の習も皆々打捨、一ツ所のと、のふる用様をしらせん為にて候。一度用たるならひハ捨てもそなわりて有物にて候。初めより高き工夫にてハ下段の諸作と、のふらぬ故に、勝口思ふ所へゆかぬ物にて候。せんたんの打こみには、場をかへる心持第一に用申候。」とある。

『武藏野』（『史料』・下巻一〇六頁）にはまた、「二葉と云心持なり。うちこみならふ事あしきにより、太刀先をはつして、二星を太刀にてうちこむ也。太刀さき、ならハさる事をせんたむと云、鑓ニも同事也。」とある。

(32) 例えば「五観一見之事」にあつたように、五観は一見に集約され、それは捧心であるとされた。ここにいう捧心の心持の仕掛けとはいかなることか。『月之抄』（『史料』・下巻四〇頁）の「捧心之仕掛と云心持之事」の項には、十兵衛三藏が「私ニ云ク、是のならひは、敵ト一体ニ成ル心持也。家光公被ニ仰聞一所也。ナキ所ニ心ヲ付テ仕掛、敵の心のヲコル気サシエ、我ヲコル心ヲ可為乗也。敵ト我ト一体ニ成心ゆへ、打ヤミテ則勝と成心持也。至極向上儀也。」

と述べている。捧心は五観の代表であった。その捧心の仕掛という心持は、敵と一体になる心だという。未だ動き働きのない敵の心につけて仕掛け、敵の心の動き働きの起こらんとする兆へ、わが心も合わせて起り、その心を敵の心に乗せる（敵の心の動きを引きとって、それに乗りかかる）、すると、敵と我が一体になった心であるから、打ちが止んだときには、そのまま則ち我が勝つことになるという心持だと説明している。これは極めて高度な心法で、しかも技法を伴うものであるから、至極向上なる法だといっているのである。

The Philosophy of Yagyū-shinkageryū Heihō-densho

(The Secrets of the Martial Arts)

A reading of *the first Densho* and its theory of mental techniques

Susumu TAKAHASHI

This research looks at a martial arts' text characteristic of Japan's early modern period, with the aim of clarifying its unique views concerning the world, humanity, body-mind, technique, etc. In particular, this research attempts to demonstrate how the text embodies a philosophical system concerning the nature of mental and physical techniques as they relate to the way of the sword. However, as becomes clear later, the nature of mental and physical techniques in the way of the sword are, on the one hand, presented as specific workings of the mind such as attitude and mental conduct. On the other hand, these are given as specific sword techniques to be used when facing an opponent.

As stated in the expression, "the essence of the martial arts is in unity of mind," techniques of the sword are inseparable with the body, hands, and feet of the person wielding it; and the body, hands, and feet are inseparable with the mind or consciousness of the person who sees and hears. In this way, mental and physical techniques are continuous, with the two being one, and the one being two. Further, both are unified in that they embody the same laws, or principles.

This paper gives a reading of the first transmitted text which Yagyū Munenori presented to the Shōgun, Iemitsu, and examines the theory of mental techniques presented therein.